
世界樹の御子たちへ

GARU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界樹の御子たちへ

【Nコード】

N7999D

【作者名】

GARU

【あらすじ】

ある時、1人の女の子が赤子を見つけた。ある日、1人の少女は1人の青年と出会った。そしてその青年は…。数奇な縁に結ばれた彼女ら彼女らの平穏と騒乱の物語。

序章 第一話 【終焉】

その世界は何もかもが飲み込まれていた。

繁栄を約束されていたかのような国も…

賑わいが途切れる事のなかった街も…

慎ましく穏やかな空気に包まれた村も…

理不尽と暴力が隣人である者たちが巢食う無法の地も…

王も…

貴族も…

司祭も…

罪人も…

在り様の差など関係なかった。

無論ソレは人のみに降掛かりし厄災などではない。

獣も…

鳥も…

善きモノも…

悪しきモノも…

魔を内包するモノ達すらもまた飲み込まれていった。

滅びは全てに等しく。

されど全てを押し流しきられるほど命というのも脆弱ではなかった。

今その者たちは生きてこの場に立っているのだから。

全ての元凶…

今はただ悠然とそびえたつソレ。

そして…

「なあなんでもうなんだ？」

男は苛立たしげな口調を隠そうともせず、ただ目の前に浮かぶ半透明の少女を睨み付ける。

「―そんなに心配しなくても大丈夫だよ。ホラわたし的にはちょっと眠るぐらいになるだろうと思うし…―」

睨まれた少女は何でもない事だからと、苦笑と共に言葉を返す。

「んな問題じゃねーだろうが！」

男はそんな事言ってる訳じゃないと脇にて延びる若木に拳を叩き付ける。

「なあ今すぐ如何こうしなきゃなんねえ訳じゃないんだ。何か他に方法だつて見つけれられるかも知れねーじゃねーかよ。なあ」
だからちよつと待てよ。

必ず見つけ出してやるから。
だからまだ待てつて。

引きとめようとする言葉は…しかし少女の心を変える事等できず。

「……クソッこんな時ばかり頑固になりやがって…」

男は悔しげにそれだけの言葉を最後に口に出した。

「ーごめんなさー」

少女は申し訳なさからただ謝罪の言葉を口にするしかできない。

「あやまんるなよっ… ったく、はなッから俺の言うコトなんざ聞く気が無いくせしやがって」

「ー… ごめんなさい。でもコレばかりはどうしてもー」

悔しげな男の言葉に答える言葉はソレしかなかった。

何故ならソレは否定する事のできない… 自分の中のもうすでに決めてしまっている事なのだから。

「なにいつてるんですか。謝る必要なんて全然ないですよ」

そんな2人の、ある種緊迫した空気を…

まるで感じてないかの様なゆったりとした声が振り掛けられる。

「恋する乙女に… 愛する人に会いたいと願う女の子に… 待てと行くなと言うこの人がたんに外道なだけです」

清らかさを絵に描いたかのような微笑と共にさらつつむがれた言葉に等の2人の動作が瞬間、硬直する。

「ーなっとなんななに言ってるんですかスイさんっ」

「すっスイ… なにさらつと暴言吐いてんだよてめー」

混乱に慌てふためく少女。

連れの言葉の暴力に頬を引き攣らせる男。

そして…

「ふふっ可愛い」

男の言葉をいつそ気持ち良いぐらい完璧にスルーしつつ… そんな少女の反応を見て、ただ可笑しそうに笑う女。

なんとなく三人の力関係が目に見える瞬間であったり。

「でもそういうコトでしょ？ あの子の言葉が真実ならそれはきつと変え様の無い未来。それなのに私たちの都合で何年も何十年もつきあわせてしまうなんてあまりに酷じゃないですか」

そして…そんな微妙な空気など初めから無かったかのように語り続ける、スイと呼ばれた女。

「……………」

「……オイお前まさかあの話信じて…」

スイの語りに今まで騒いでたのが嘘であつたかの様に黙り込む少女。

そして男もまたスイの語る言葉の真意に気付き…

「サリスタは信じてないんですか？」

言葉を詰まらせるサリスタと呼ばれた男に、何を当たり前なことをと言いたげな視線を向け言葉を続ける。

「私は信じてますよあの子の言葉。今更もう遅いかもしれません。今はもう疑いなどありません」

悲しみと後悔の交じり合つた様な苦い思いの告白。

「もつと早く…せめて私たちだけでも信じてあげられていたのなら今という時は変わっていたでしょうに…」

ソレは誰もが信じなかったとある戯言の事。

「でもそれはっ！！」

「ええ、仕方の無い事だったのかもしれませんが」

信仰に疎い貴方ですらそうなのですから。

私たちの様な…神の膝元で祈る者にとっては。

それは信仰する全てへの裏切りに値するような言葉。

到底信じられない…

しかし現実には…

……彼の言葉を肯定してしまった。

異端と呼ばれた彼の…

私たちは結局彼を護る事はできても、真に信じる事はできてい

なかった。

だから…

「別に無理矢理なんかじゃありません。私はただシスとカイの幸せを信じているんです」

そう言い切ったスイの表情に陰りはもう無く…

「だってそうでしょ。この2人は凄く良い子なんです。そんな2人が幸せになれない筈なんてないんです」

力強く拳を握らせるかの様な勢いの在る断言。

「だから信じられるんですよ。だって2人ともこんなに想い合ってるんですもの、再会できないはずがないんですよ」

信じていると言うよりも…そうじゃなきゃイヤッていうただの私の我侭だったりもする訳です
しね〜。

その陰りの取れた微笑みはいつの間にか年相応の…否夢見る頃の少女のモノの様にと変わり。

「だから頑張つて。絶対大丈夫だって信じてるから」

裏切ったら承知しないんだから。

最後にそう悪戯っぽくウインクを一つ。

「ーはいっー」

シスと呼ばれた少女は泣きそうな…

それでも今浮べられる最高の笑みで答えた。

序章 第二話 【神様の子供】（前書き）

幼子視点なのでひらがな主体の文です。

多少の読み難さは見逃していただけると有り難かったです（／／／

序章 第二話 【神様の子供】

——…それは何時かの時の思い出…—

「…ん？」

その日わたしはあそびなれたこのばしょで、なれれたしんだこの森で、たった一つの…はじめてのソレをみつけた。

いつものばしょ。

みなれたみち。

ふかくて向こうの先までぜんぜんみえない…だけどとてもよくみ

しつた森。

すっかりみなれたところのはずなのに…

そのたった一つの…

めのまえのそのものがあるだけで、ぜんぶがぜんぶちがってしまっているかのように見えた。

森じゃなくて杜。

ふつうではないしんせいでとくべつな杜。

ふとどこかできかされたことばをおもいだす。

そのことばが今ぴったりとこころのなかにはまった。

すなおにただそうかんじた。

たった一つのそれ。

ただそれだけのことでぜんぶわかったきがした。

ただそれだけのちがい。

それこそほんとうならばソノひょうげんはただしい。

ちんじゅの杜とよばれるこのせいいきは、そうよばれてしかるべきせかいなのだ。

…まえにおべんきようでセンサーが言っただことばがあたまのなかでよみがえってくる。

でもすこしまえまでのわたしには…そんなとくべつでさえ…

そのおはなしをきいてた時のわたしにとってはあたりまえのばしよでしかなかった。

あかちゃんのところからみてきた。

ちつちやなところからかけまわっていた。

もちろんはいっちゃんダメだといろんなおとなのひとにおこられたこともあるけど、こりないわ

たしはこのひもまたいつもどおりふみいったのだ。

このおはなしはいっぱいきいた。

おとうさまからも。

おかあさまからも。

おばさまからも。

センサーからも。

そしてジーさまからも。

だけどわたしにはどうしてもそんなとくべつでしんせいなばしよにはみえなかった。

あたりまえだったから。

あたりまえすぎて、ソレがとうぜんのいまだったから。

なにをおしえられてもわたしにとってココはたのしいあそびばだつた。

そうあの日あのこをみつけるまでは…。

「…あかちゃん？」

しぜんと口にしたことば。

そしてそのことばどおりのそのい。

このもりの、それもけっこうおくのほうにあるはずのこのばしよ。ほかのどの木よりも大っきなそのごしんぼくのしたで…

かみさまのばしよだからと、いつもはだれも足をふみいれないはずのこのばしよに。

……この子はいた。

やすらかなねがおはとってもきもちよさそうで。
ソレがなんでだかうれしくて。

なんでかとってもとってもとくべつに見えて。
そうきつとこのことはとくべつで…

ほかのふつうなあかちゃんとはちがうんだ。
だってこの子がいるだけで、こんなにも森がキラキラかがやいて
るんだもん。

森じゃなくて杜。

この子がいるから杜。

みんなが言っていたのはきつとこういうコトなんだ。

わたしはどうしてだかうれしくなつて、ただそのきもちにうしろ
からおされるままに。

「うわあ」

はじめて見るあかちゃん。

そしてきつとこのあかちゃんは…。

わたしはおこさないようにとがんばってだっこする。

こどものわたしじゃちよつとたいへんだけど、がんばってだっこ
する。

いっしょうけんめいそつとそつと、もときたみちをもどる。

見えてくるはいつけんのおうち。

ジーさまのおうち。

わたしはこの子をそこまでつれていくんだ。

「ジーさま」

げんかんのまえでいっぱいこえを出してジーさまをよぶ。

このままじゃとびらあけないから。

そしてとびらのむこうからのんびりしたジーさまのこえ。

「ん」今日はどうにもお早い帰りじゃの。ウチのわんぱくお姫様は」

わらいながらジーさまが出てくる。

ちなみにわんぱくつていうのはげんきがいっていみなんだつて
ジーさまが言つてた。

そうだよ、わたしいつともげんきいっぱいだもん。

「うんつえつとねえとねつわたしね、かみさまのあかちゃんみつけたの」

そういつてだつこしてたあかちゃんを見せてあげる。

「なっ…」

アハハッビクリてるビクリしてる。

おもしろいかお。

こんなかおするジーさまあんまり見ないからそれだけでうれしい。

「どうしたんだいこの子は」

だけどすぐにかわつちゃつて、こんどはこわいかお。

ジーさまがおこつてるときのおかお。

「あつあつああの…えつとね…かみさまのあかちゃんなの」

だからわたしはとたんにになくなる。

だつてこのジーさまはこわいんだもん。

「神様の？」

「……うん……」

わたしわるいコトなんてしてないのに。

この子だつてジーさまに見せたくて…おしえたくていっしょうけんめいだつこしてきたのに…。

「どういうことなんじゃ？」

「えつとね…うんと…もりのなかでねてたの。いちばんおつきいきのトコでね。だからね」

あそこはかみさまのおうちだから、この子はきつとかみさまのあかちゃんなの」

もしかしてかつてにつれてきちゃったからおこられるのかなあ。

かみさまのあかちゃん、わたしがかつてにつれてきちゃったからわたし、かみさまのあかちゃんとおちやつたんだ。

「……………うつ……………ぐすつ……………」

わたしわるい子なんだ。

そうおもうととてもかなしくなった。

わたしがわるい子だからジーさまこわいかおなんだ。

わたしがあかちゃんとおちやったから。

かみさまもきつとおこつてる。

わたしがあかちゃんとおちやったから。

おかあさまもいつてたもん。

わたしがいなくなっちゃうとかなしいって。

あかちゃんもかなしいよね。

わたしがかってにつれてきちゃったから。

かみさまとはなればなれにしちゃったから。

わたしだってそんなのイヤだもん。

だからわたしはわるい子なんだ。

みんなかなしんです。

わたしがわるいんだ。

わたしが…わたしがあかちゃんとおちやったから。

「うわあ……………ん」

「ア、アテナっ」

「うわあんゴメンなさいゴメンなさい。ジーさまゴメンなさい、かみさまもあかちゃんもゴメンなさい…あ〜ん…ヒクックッゴメン…グスッ…なさあい」

ないた。

いっぱいいないていた。

いっぱいいっぱいゴメンなさいしながらないてしまった。

わたしはイヤだったから。

おかあさまとはなればなれになるなんて。

おとうさまとも、おばあさまとも。

もちろんジーさまとも、ずっといっしょがいいから。

どっかになんて行ってほしくないから。

そんなのすごくすつごくかなしくなるから。
だけどわたしは…

「わぁ~~~~ん」

わたしがつれてきちゃったから。
かみさまとはなればなれになっちゃった。

おばあさまいった。

わたしがイヤなコトはほかのみんなにもしちゃダメだって。
そんなコトする子はわるい子だって。

だからわたしはわるい子なんだ。

だからジーさまもおこってるんだ。

そうおもうと。

そうかんじると。

とてもかなしくて。

なみだがどんどんできちゃう。

「アテナ…」

あたまにおつきなてがのせられる。

「アテナや…」

おこられるっ。

そうおもってたのに…ジーさまのこえはやさしいいつものこえで。
わからなくなっ。

わるい子のわたしはおこられてるはずなのに、ぜんぜんいつもど
うりな…

そのあつたかくてやさしいこえのいみがわからなくて。

わたしはおもわずジーさまのコトみあげてた。

「その子は神木の根元に居たのじゃな」

みあげたジーさまはやさしいおかおでわらってくれる。

「他に何も無かったかの？」

わたしをなでってくれるてがあたたかかった。

「うん、このこだけだったよ。ホントだよ」

「そうかぁ…」

わたしのことをきいて、なんだかすこしさみしそうにわらうジ
ーさま。

わたしの方にぐっとおかおをちかづけて、あかちゃんのかおをの
ぞきみてる。

「実はな、この子はジーが神様からお預かりする事になった子なん
じゃ。昨日の夜神様からそう頼まれてな、これから神木の下に迎え
に行こうとしていたんじゃよ」

わらいながら「わたしをなでてくれてたで、こんどはあかちゃ
んをなでなでしながらわたしにおしえてくれた。

「えー……ジーさますごいい」

「ホッホッホそうじゃ、だから心配せんでよい、ちゃんとジーが聞
いておったからの、神様もアテナがこの子と仲良くして欲しいと思
ってるからのお」

「ホントっ」

「おーおおホントじゃじゃからアテナも一杯この子と仲良くしてや
るんじゃぞ。何せ今日からはおねえちゃんなんじゃからの」

「うんっ」

うれしくて「ほんとうにうれしくて、わたしはおもいつきりうな
ずいた。

この子といっしょにいていいんだ。

なかよしになれるんだ。

わたしがおねえちゃんになるんだ。

うれしくて。

ほこらしくて。

でもちよつとだけこそばゆったいきもち。

わたしはあらためてあかちゃんのかおをのぞきこんだ。
かわいいあかちゃん。

「わたしがおねえちゃんだよ。よろしくねっ」

わらってごあいさつ。

おねえちゃんとしてちゃんとしないとダメだから。

「ねえジーさま？」

「んっ」

「この子なんておなまえなの？かみさまからおしえてもらえた？」

「おうそうじゃそうじゃな。ジーもすっかり忘れ取った。えっとな、この子の名前はの……」

……

……

……

…

…それは遠い日の記憶。

あの日2人は出会った。

あの時の少女はまだ幼くて…

難しいことは何も分からなかったし…

教えられるままに素直に信じてた。

何一つの疑問も感じる事無く…

そうして少女は唯一無二の…親友となる幼子と出会った。
場所が場所だけに、その身元についてかなり大掛かりな規模

で捜査が為された。

結果は判らないというコトが判っただけ…。

しかし…

因果が判らぬが故に…

正体不明という名の恐怖は確実に城内に大きな波紋を生んだ。

その事を少女は随分たってのちに聞かされる事となった。

しかしそんな事など私たちの間にとっては些事と言ってもいいところ。

少なくとも少女自身はそう想ってる。

今も昔も変わらずに。

そして先に続く未来でもまた…。

序章 第三話

【日常（1）】（前書き）

前タイトルがどうもしっくりこなかったので改名させていただきました。

序章 第三話 【日常（1）】

幼い頃、それは私にとって当たり前の事だった。

少し成長して、それが不思議なことだと聞かされた。

そう言うみんなが私には逆に不思議だった。

そして最後のあの日…

私はその理由を知った…

あの日以来わたしはあの夢を見ることがなくなった…

しかしソレは当たり前のこと…

当然の理由からの結果だった…

何故ならその日その世界でのその私は…

その日を持って、人としての人生を終えたのだから…

「んっ…良かった。今日はずっと天気が良さそう」

最後の洗濯物を干し終えた所、空を見上げてグツと背を伸ばす。
雲も疎らで、空気も乾いている。

洗濯物たちにとっても絶好なお洗濯日和。

お昼の用意もそろそろ考えた所で、ふと姿を見かけてないところある人物の姿が頭の中を掠める。

「そう言えばアテナ全然戻ってこないけどどうしたんでしょう？」

考えるは幼馴染の姫様の事。

朝からいきなり転がり込んできて…それ以降、全く姿を見ていない。

杜の奥へと入っていったのは確かなのだけど……。

「……まさか…」

ふと嫌な予感が脳裏に浮かぶものの、次の瞬間には一笑に出来る自分がいる。

「ってソレは流石にないでしょうよね」

ありえないありえない。

もし万が一が起きてたとしたらそれはどれだけの確立からか。

そう樂觀できるぐらいには仕掛けは万全。

今までだって大丈夫だったし、これからだって大丈夫。

「まあ確かにアテナって時々神懸りのな程ありえない何かを引き起してくれたりはするのは確かですけど…」

いやいやいや…うん、もう考えるのは止そう。

なんか思えば思うほどにとつぽに嵌りそうだし。

あはは………

………

…

「……………はあー」

あと有り得そうだとしたら…

これ以上考えない為にも別な理由を模索。

そしてそんな私にそよ風が一陣撫でてゆき…

その心地よい風の感触に眼を細め…

静かにそつと遠くを見るように天を仰ぐ。

見上げるは雲一つない清しいまでの青。

日は暖かくて風の気持ち良い。

これはこれはよく考える必要もないくらい絶好の…

お昼寝日和。

「あ〜〜」

思い至る。

「もしてもしかすると…」

瞬間…なんとなくそんな気がする。

と言うかそれしか考え至らなくなっている。

でも確か…

「確か今日は…」

思い返すは少し前に愚痴っていた時の言葉。

何故か知ってるアテナのスケジュールについて。

頭の中で広げられたカレンダーを確認。

「…多分確定ですね」

もう一度空を見上げてから溜息一つ。

ひとまず洗濯籠をそのままに、杜の奥へと向う事にした。

「本当に…一国の姫君として問題無いんでしょうか？」

そろそろ年頃だと言うのに全く頭の痛い…。

愚痴の一つでも言えなきゃやってられない気持ちだったりとい

うのは私にだって言えることかも知れませんよ。

あんな調子で本当に大丈夫なのでしょうが？

淑女と言うよりも奔放といった感じのその在り様故に特にこの思
いは強い。

これが短所ならハッキリ指摘たり注意忠告どころか、覚悟さえ決

めれば強引に矯正だってできるのですけど。

なまじ私自身から見たら長所なんですもんね。

王族：否、支配階級の人種としての在り様としてはかなり危ういが、それでも人としての魅力としてあの性格はプラスに働いている。その事はサージラス王、アテナのお父様も言っていることなので城内でも評価は近い感じなのだと思う。

でも…それだけにソコに浮かぶ隙を突こうとする様な輩の存在が怖い。

ココには城内の様子や噂話の類はほとんど届いてこないから余計に。

不透明な内情は想像を否な方向に進めがちになる。

それは自覚しても止めようがなくて…

その上、そのわずかな情報のほとんどがアテナ曰くな訳だし…

行為馬の抜けたトコを見せられると…：…：…ねえ…

まあ私個人にしてみただけでは変わらないな…って感じで微笑ましいんだけど…

それが逆に将来を考えるとときの不安材料だったり。

まったく困った感じですよ。

アテナも私も。

向かう先は少し奥まった位置に在る草原。

多くの木々が自然のままにあるこの森で、まるで避けられたかのように開かれた場所。

天上には日光を遮る葉も枝もなく。

日の光を受けた地面には湿っぽさなど感じられなく。

更には芝と見間違っほどの柔らかな若草がその上を覆う。

何故このような場所かと、思わず思いたくなるほどに完成された天然のベット。

初めてその場を教わった時、自然の産物などとまるで信じられなかったのは多分私だけじゃないでしょう。

そしてきつとアテナは今日もソコ。

昔から面倒事とを感じる度にソコに転がってだらだらしてる。

そして今回も…でしょうね。

数年前から毎年この時期は似た様なパターンで繰り返してる訳ですし。

「本当に、手間のかかる人なんですから」

でも煩わしく感じたことはない。

むしろそんな日々を私自身求め望んでいたりしてて。

自覚があるだけに余計困ってしまう。

「本当に…困った人ですよ、アテナ」

では行きましょうか、昔とはすっかり立場の逆転してしまった姉を起こすべく。

序章 第四話 【日常（2）】

案の定と言うべきか…

そこには予想通りなアテナの姿。

手足を放り出して…なんて姿では流石にないですが。

それでも外で着の身着のままにと言う状態で既に淑女としては失格である。

まあ女性として終わってる訳ではないのが唯一の救いなのでしょうけど…

もちろん寝姿が前者だった場合には、その烙印を押さねばならなかったでしょうけどねっ。

「…本当にコレが我が国を支えてくださる姫君なんのしょうか？」

いささか…

いやこれはけっこう…

この国の行く末が少し不安に思えてくる。

まあやる時はちゃんとしてくれる子だというのは知っているのだけ。

「アテナ」

とりあえずの最初に一声の呼びかけ。

「……ん？」

むろんこの程度じゃ起きてくれない。

「アテナっ」

更に強くもう一声。

モゴモゴと口が動いてはいるけど、ただそれだけ。

普段ならココまでで目覚めの兆候が現れはじめるわけなのだが…

今日のアテナ、なかなかに眠りが深いみたい。

「アテナってば、もお風邪ひいても知らないですよ」

ついには身体を揺さぶっての物理的刺激による意識の引き上げに及ぶ。

コレは流石に無視できなかったようで…

目は閉じられてはいるものの、仕草で行動を拒絶してくれる。

「もうっいいい加減起きてくださいっ」

更に一声かけた所で、ようやくその瞼が開き始める。

それでもしばらくは寝惚け眼。

少しの間を置いて気付いたかのように私を見上げ…

「んつと…スイ？」

ただその姿を確認してと言った感じに零れ落ちた一言。

「はいはいあなたのスイですよ。いい加減起きて下さい、春先とは言えまだまだ風は冷たいんですからね」

そう差し出した手をアテナはが取るのと同時に思いっきり引っぱって上半身を起こさせる。

「ん~~~~…」

途端にその口から漏れる呻き声。

まだ完全には目覚めていない様子。

現にうつらうつらと今だ身は頼りなく舟を漕いでるし…

半開きのその眼はどこか虚ろだったりしてる。

「もおちゃんと起きてくださいっ」

「ん~~~~」

意識を引張り挙げようと声を張り上げてもただ手を振られるだけ。意識「眠い、五月蠅い、もう少し寝かせて」といったトコでしようか。

「もお仕方ないんですから」

あまりに難敵な目の前のお姫様。

…本当に仕方ない。

奥の手といきましょうか」

周囲に誰も居ないのを確認。

目の前のアテナも今夢の中に意識を引張られているのも確認。そして…

……

……

…

「—ひゃあっ!!」

途端跳ね起きるアテナ。

跳ね上がった身体がまた地面に落ちた所でキョロキョロ。

事態と状況に頭が追いついていない様子。

その眼はパツチリ開かれていて、眠気の欠片もはや見当らない感じ。

ただ自らの身に起きた『何か』に多少の混乱有りといったところでしょうか…

視線はキョロキョロ、両手はペタペタと身に触れている。

そして私は…

「お目覚めですかアテナ？」

今一度、目の前の姫に声をかける。

「……あれ…スイ？」

声に釣られてかその眼が私に向けられる。

「それともまだ夢の中でしょうか？アテナ・シリヌ・ラ・セレス
トリー又様」

今だ状況が飲みきれきれしていない様子の視線の主に向け、再度の
問いかけ。

「あれ？えつと…スイ？」

「はいはいあなたのスイですよ。ところで目は覚めましたか？ア
テナ」

「あ…うん」

頷きつつもう一度周囲をキョロキョロ。

場所は見慣れた森。

側には私。

横たわったままの自分。

そんな感じでしょ…うねアテナの頭の中は…

「…私、寝てた？」

呟くような問い。

「ええ、それはもうぐっすりと」

そして答える私はキツパリと…。

なにせそれ以外答えが無いほどでしたから。

「まったく一国の姫としての自覚あるんですか？こんな所で寝て
るなんて。王女として以前に女性としてすら問題有りじゃないかと
思いますよ」

今更言っても直しようがない事ぐらい、私だって判りきつてはい
るんですけどね。

それでも誰かが言わないと、後はもう坂を転がり落ちる雪玉の如
く…。

いくらなんでもさすがにこれ以上にはなつて欲しくない。

例え人目が皆無なココであろうとも。

と言うか、ココだからまだギリギリなラインでセーフだったりす

るのだから。

「なつ失礼な、私だってちゃんとやってるわよ。それでも周りからは清楚で可憐な姫君様って言われてるんだからね」

もちろんそんな事は十分知ってるコト。

けども私から見れば所詮は上辺だけの猫被り。

何時化けの皮が剥がれるか、傍から見えて結構ヒヤヒヤもの。

ただでさえ王族。

それも第一位の王位継承者なんて立場だったりする訳で…

常日頃から国なんていう看板を背負わされていたりする。

何気ない言動の一つですら、国の評価に直結されるのだから。

私にはとても真似なんて出来ないでしょうし。

したいとも思いません。

でもだからこそ、誰も踏み込んでこないココを自らの憩いの場としているのでしょう。

とは言え、そろそろ流石にのんびり遊んでられない頃合でしょうか。

「そんな姫君様なのでしたら遅刻は…拙いですよね」

ニツコリと笑顔で空を指差す。

動きに釣られてアテナの視線も上を向く。

空には疎らな雲と青い空だけ。

いつも通りの当たり前前の空。

まあ今日のトコはその日の位置が示す時間だったりするのだけど…。

なぜだかどうにも気付いてない感じ。

というか、日差しに照らされ、また再び和みモード。

私の言葉に含んだ意味にすら気付いていない様子。

と言うか間違はなく綺麗サッパリと忘れてますね、ホントに。

「…………お昼から、マセリアナ候がお見えになられるのではなかったのですか？」

困ったような呆れたような自分でもいまいち判別不可な気持ちで

の嘆息を一つ。

「……………あつ」

しかしアテナにしてみればそれドコロではない話。
やっぱりすっかりその頭の中から空きえていた様子。

「まったく、すっかりしてくださいよ。仮にもご自分が主役なの
でしょうに」

「うゝスイは気軽に言うけどさー毎年なんであんなに大仰にする
かなーって感じで、結構肩凝るんだよ、ホント」

困り顔の私に対してマユをハの字にして愚痴るアテナ。

「まったくもゝ何もあんなに大掛かりにしなくてもって」

「ハイハイ時間もないですし愚痴はそこまで。ソレも真正銘立
派な公務な訳でしょうし、一国の姫としての義務ってコトで我慢し
てくださいよ」

寝ぼけてるせいかな、なにかこのまま続きそうな感じの愚痴を無理
矢理切り捨てて、強引に立たせる。

「ほらほらソコ呆けてないで急いでください、決してゆとりある
時間ではないのですからね」

ちよつぱり現実逃避しかけているアテナを現実へと引き戻しつつ、
その後の行動を促す。

まだ時間前とは言え淑女の仕度にはソレ相応の時間が必要なのだ
から。

「ゴメンっそれとありがとう」

私に言われるまま、何とか自力で起きる。

そのまま王宮へと駆けていくアテナ。

相変らずなそんな仕草に思わず零れる笑みをそのままに。

「つぎはまた今度。ゆつくりできる時にでもしてくださいね」

向けた言葉の答えは振り返る事無く振られた手の動きのみ。

時間的に、流石に今回は本気で慌ててるみたい。

さて、それでは私もそろそろ準備しなくてはですよね。

アテナの後姿を見送りつつ、私もまた踵を返す。

仕事の方も昨日で今月分のノルマまで完了しましたし。

今日は街の方に出ても良いかも。

ココ何日か顔を出してなかったから丁度いいかもしれないですし。
天上の瞳のストックもまだ少なくない数が残ってる。

まあただ…

「……………いい加減手掛かりの一つでも見つけなきゃなんですけどね」

何時かの可能性の時。

…残された時間がどれ程なのか判らない。

…その時が訪れるのかすら判らない。

出来るなら来て欲しくない時。

でも…コレはその時まで成さなきゃいけない事。

全てはあの時の後悔を繰り返さない為に…

私は今ココに居るのだから。

「とは言えまずはその前にお昼ご飯とお昼ご飯です」

まっ今のところコレはコレ、ソレはソレってことで。

「あつ洗濯籠も回収してこなきゃ」

1人これからの行動を口に出しながら我が家へ戻り道。

確かにアレは何よりも重要で、成さねばならない事ではありますけれど…

日々の雑多な日常も…

これはこれでまた結構忙しいものですからね。

間章 第一話 「アスカルディア」

樹界の都。

聖都とも魔都とも言われていた…

何時かかは始まりの町ともさえ言われていたこの都市。

アスカルディア王国首都アルアシスが冠する現在の呼び名。

そして私が住まうこの地こそが…

「まったくちよつと眼を離してただけなのに、なんであんなトコまで飛ばされてるわけ？」

突風でも吹いたのか思いもしないほど遠くまで転がりいつてしまっていた洗濯籠を見つけ出してのようやくの帰宅。

それもこれも全部アテナのせいだと一人文句を言いつつ、いつもの場所に置き片付ける。

かつて神々の怒りに触れ世界が終焉を迎えた後、神々の慈悲の元赦された人々の手によって築かれたとも…

神々が新たに創造せし、人々を住まわせるために御身自らの膝元に築かせたとも…

起源たる幾つかの伝承。

ただ全てに共通するはこの地この場所。

伝承に記される最も古き歴史を刻む場所。

そしてその教えの象徴であり。

全ての諸説が示す唯一絶対の神話。

神々の世界と人々の世を繋ぐ賭け橋と崇められる。

ソレこそがこの聖域と定められし杜と共に在り続ける世界最古にして最大を誇る神木。

世界樹と呼ばれし巨大樹である。

「お昼は……簡単に。まあ向こうに着くまで………そう言えば向こうで食べると言う選択肢もありましたね」

予想外の時間の浪費に悩ませていた頭が別方向からの解決策を提示。

それにあっさり乗っかる事にして、今まさにと取り出した調理器具を元の位置に。

そのついでにといくつかの携帯食…と言うか、単に小麦などを固めて焼いた焼き菓子を一掴み、口に放り込みつつ次の仕度。

作法云々に関して別に私は気にしなくても良いですし。

貴族でもなければ気にする人目もココにはない。

だからアテナに口煩く言っているのも私は気にしなくて良いのです。だって私、王族でも貴族でもないですから。

とはいえ庶民、臣民ですらないけれど。

そんなどうでもいい思考を頭の中で流しながら、手だけはパツパツと動く。

一通りの身支度に、依頼の品、ある程度のお金に最小限に纏めた仕事道具一式。

アルカルディア王国はこの世界樹を中心に広がる国であり、そもそも世界樹の麓こそがこの国の始まりとさえ伝えられている。

そしてソレは紛れもない事実であり、建国当初からこの聖なる神ノ木を奉り、信仰の対象としてきていた。

その信仰は遥か昔より、国を越え…世界全域にまで浸透している教えの形。

故に排斥の歴史は在りえず、信仰が途切れる事もなかった。

たとえ、歴史上幾度かその国の名が変わっていても、神木信仰の宗主国としての位置付けだけは変わりなかったのだ。

否、変えようがなかったと言った方が正しいか。

いかな独裁者であろうと世界を敵に回してし、長く栄華を保つ事など不可能であつたから。

ソレは過去が証明してくれている。

幾度となく繰り返すように。

そしてだからこそ、何時の時代でも神子はいかなる権限をも持つ事は赦されていない。

その時々王が赦さなかったのだ。

神子とは…

ただ神を崇め。

ただこの地のみを護り。

ただこの地のみに仕える。

ただその様に在り続ける事だけがその存在の全て。

それだけが在り様の全て。

結果…

王は常にその傍らに神子を置く。

信仰の象徴として。

王は国を支え…

神子が信仰を支える。

それはどれ程の時が流れ変化が在ろうが変わらぬこの世の在り様。

そしてそれは…

やはり今も変わることはなく…

「さてさてそれじゃあいつてきまーす」

今はもう返事が返ってくることはない。

寂しいと思う。

でも、それでも何も言わないよりかは全然良いと思うから。

だからこれは家に向けての出かけの挨拶。

たった一人きりの単なる自己満足。

でも悪くない自己満足だと思う。

まあここで声が返ってくるとなると、それはそれで色々と拙いんですけどね。

それでもやっぱり少し寂しいと感じる事があったり…

無性に誰かの言葉を聞きたくなったり…

そういう時はやっぱりちよっと切ない。

今はもう大分慣れたけど。

ふと声が返って来てた頃が懐かしく…そして遠くに感じるのも本当。

特にアテナが帰ってからの一時は余計に。

「えーいっダメダメいつまでもコレくらいでセンチになってどっするんです私っ」

両手でパチンと両頬に。

自分自身に活を入れる。

ココはこうでも、向こうに行けば否でも賑やかになるんです。

うんっそうそう何の問題ありません。

「と言う訳で出発出発です」

支度し終えた荷物を片手に引っ掛け改めて家を飛び出す。

向かうは杜の奥。

世界樹の大木の麓へと。

今代の…世界樹の神子たるスイの日常はこうして紡がれている。

本来、神子に与えられるは世界樹の麓に広がる聖域と呼ばれる杜のみ。

それは政を取り仕切る王族貴族の諸侯らがその信仰という絶大な影響力を恐れて故。

神子とは本来その一生をこの聖域にて神に捧げるのが役目。

ただその存在こそが全てなのだから。

神子とは信仰『のみ』を支えておればよい。

表舞台に立つにはその影響力は不和の大波を立てかねぬほどに深く大きなものだから。

もつとも…

そんなの見つからなければ良いというのがスイの考え。
と言うか、信仰の対象が対象だけに信仰のしようがないと言っ
のが更に正直なところ。

流石にアテナにも言える訳がないのだけど…

それでもその気持ちは変わらなくて…

今日もいつもの様に、地下の抜け道から外の街へと抜け出していたりするのだったりなのである訳なんですよね。

一章 第一話 【遭遇】

それはいつもと変わらぬ日々。

当たり前過ぎるほど当たり前なありふれた日常。

続く事が当然で…

変わる変わらぬなど考えもしないような…

変わる事などないと錯覚まで起こしそうな…

そんな…

変化など感じさせないほど穏やか過ぎる営み。

しかし…

世界は気まぐれで…

何の前触れもなく…

唐突なほど突然に…

時として世界は大きな変化を産み落とす。

例えそれが…

最初、まず見間違いかと思った。

ありえない…瞬間、何もかも否定したくなっている自分に気付く。
混乱……しているのでしょうね、私。

ああたしかに。

確かに私混乱してるみたいです。

このメチャクチャな感情を現そうとするとその一言しか思いつき
ませんし。

確かに私は混乱してる。

この…な感情の本流はそうとしか言い表せない。

怪訝…

困惑…

懸念…

驚愕…

否定…

恐慌…

肯定…

歡喜…

不安…

安堵…

様々な感情と思考。

全てが今の私の状態であって…

全てが私の状態を表すには至っていないモノ…

故に私は今混乱している。

…何故かそう冷静に受け止め現状を在りのままに見下ろしている
自分を感じているのもまたそれ故なのかも知れない。

しかし、ソコから先に進めない。

様々な感情に雁字搦めにされたかのように、ただただ見入るしか
出来ない自分。

そんな自分を見下ろしている自分。

ああもうっ本当に訳が判らない。

何故何故こんなことになっているのでしょうか。

つい数瞬前まではありふれた日常の中に居たはずなのに。

理由は明白。

ただ信じられないだけ。

目の前の事に自身の感情が追いついてないだけ。

永遠の如き数瞬の間…

その凍った時を動かしたのは…

私自身でも目の前のソレでもなく…

遠くの方で飛び立ったであろう鳥の鳴き声だった。

ビクリー！

何気ない筈のその音に全身が過剰に反応。

鳥の鳴き声に、木々のざわめき…

普段なら気にも留めない音の数々が耳に残る。

それらの音が今はまるで別の何かに聞こえる気がするほどに。

しかし…

どんな形であれ一度身を動かす事は自身の身体を取り戻す結果となつて様で…

同様と混乱の中、それでも私は一歩前へと足を踏み出す事が出来た。

その…

目の前に…

見上げて先の見えぬほどに雄大な大木、世界樹の元に倒れていく人影に向けて。

わずか10数歩程度の距離。

これ程までに長いと感じたのは、私にとって初めての経験なのかもしれない。

息が自然と荒く。

鼓動が痛いぐらいに速い。

今にも爆発しそうな感情は抑えるだけで精一杯。

視線は目の前のその人から外す事が出来ません。

眼を閉じその姿を視界から遮った瞬間、彼がまるで夢幻の如くだったかのように消えてしまいそうで。

嫌だと、心のどこかで想う。

そうなってしまった自分がどうなってしまつか想像もつかない。
ふとありえないという言葉が脳裏に浮かぶ。

が、ソレすらも何を指した言葉なのか自分でも判らない。

思うだけで止まらない想像。

自身の足もまた…ゆっくりと、しかし確実にその距離を縮めていく。

止まる事が出来ない。

止まるうとも思えない。

少し…怖いと思うだけ。

気付けば彼の人は手の届く距離に…

でもまだ顔は見えない。

うつ伏せに横たわったままピクリとも動かないが故に。

ただその体格から男の人だと判る程度。

怖い…

でも………

そつと顔を覗き込む。

……もしかしたら…

安堵と落胆の気持ちが一瞬から力を奪っていった。

見知らぬ、誰とも知らないその彼の顔に…

今、たしかに私はホッとしています。

理由は違っていたから。

そんな事はないと、判ってはいても期待してしまっていた
自分が嫌でしたから。

でももしかしたら…

捨てたくても捨てられない望み。

故に、そんな自分を裏切る現実を…

安堵と言っ溜息で中に収められた。

だけど…

…ううん、だからこそそんな自分が無性に悲しく、寂しかった。

一章 第二話 【眠り姫(?)】

ココで1人沈んでも仕方がない訳で。

とりあえず私自身の気持ちとかその辺は今は後回し。

そんな個人的な感傷よりも現実を見ましょう。

エエ。

それに余計なこと考えなくて済めるのなら一石二鳥というものです。

…直面している問題の大きさはこの際無視です無視。

とは言え、ただこうして眺めているだけという訳にもいきません。まずは何より……

「……どうしましょう」

頬に一筋汗が流れた気がします。

なんと言いますか一つも思いつかないです。

何をどうすれば良いのかなんて。

ほっとけないのは当然なのですが…

自分という特殊な立場上、下手な手が打てないを思い出し…

ソレを如何こうする手立てが何一つ浮かばなかったりする訳なのですよ。

「本当に…どうしようこの人」

やっぱりどうにもこうにもなんともし難い現状。

なにせ17年前赤ん坊だった私が捨てられていた時だって、随分と大騒ぎになっていたらしいですし、ソレが今回は成人…と言うには少し若過ぎでしょうか？

なににせよ年頃同士の男と女。

少し想像しただけでも大騒ぎになること間違いな……い……。

「ってちよつと待つてくださいよっこれつまさかこんな人が見つかつたなんて知られたら……」

背筋に嫌な汗が…

気がするとかじゃなくて確実に流れてますよ。

もう…ほらダラダラと。

大騒ぎとかそんなレベルじゃなくてですねっ。

イヤイヤそれもそれで大騒ぎになるでしょうけど、ほっとけないほどの大騒動になるでしょうけど、今はまあいいです。

ほっといちゃダメだと言う理性の一部による叫びは…まあ良いとして、それ以上に絶妙に微妙な、その問題の中での私の立ち位置。

そんなの考えるまでもなく明確に想像できてしまう。

年頃の若い男と女。

絶対きつと間違いなく誤解される。

と言うか否定なんてさせてもらえんとすらも思えません。

17年前の時だつて関連性を疑問視されながらもお爺様は随分危ない立場に立たされたと聞いた事がありますし。

ソレが今度は…

私が何を言つてもソウ捉えられると思う。

うつん、下手したら弁解どころか言葉一つ話させてもらえないままに確定されてしまいかねないです。

素敵なぐらいに高確率で。

と言うか私はともかくこの人なんて間違いなく極刑確定じゃないですか。

なにせ世界で最も神聖とされる聖域。

今の世ですら神子と皇族以外の侵入を禁じられている訳ですし。

どこから紛れてきたか判らないですけ……ど…？

ふとココまで来て根本的な疑問にぶつかりました。

そのあまりに当たり前の…疑問。

そういえば何処から来たんでしょう、この人。

一番ありえそうなのはやっぱり地下の抜け道からなのでしょうけど、それは同じくらいにありえない事。

そもそも鍵はしっかり施錠してますし双方の入り口にだって幻影と実像に術系と物理系両面からの施錠まで施しているのですから。

それも一般流通技術からしてみれば二段階も三段階も飛びぬけた高い技術力でのモノを。

万が一泥棒か何かだったとしても打ち破られるなんてありえる筈がありません。

なにせ中途半端なカモフラージュであっさりバレでもしたら私自身が困る。

流石に極刑とまではいかないまでも生涯監視付きぐらいされかねない立場。

とは言え、大人しく杜に籠っているなんてできる筈も無い。

だからこそ数々の工作に置いて絶対の信頼がある。

なのにこの人は…

倒れてるままのその人を気にしつつ、世界樹の根元、画された入り口をチェック。

「……………」

問題ナシ。

破られた形跡どころか、こじ開けられた感じもしない。

と言うか開けられてすらいらない気もする。

現状が現状だし、少し自信が揺らいでるのはしょうがないんだと思う。

けど…一から全部自分で念入りに組み上げたコレ。

自身にとって死活問題に直結するだけのソレだからこそ、その鑑定には自信がある。

でも、だとしたら…

この人は…

「一体何処から来たの？」

それは本来なら最もな疑問。

なまじ出入り口なんて知っているだけに、直通でその考えにまで至れなかったのですけど。

もしかしたら昔のお爺ちゃんたちも似たような気持ちで私を見ていたのかも。

頭の中でふとそんなことも思い考える。

なんにしても……

目覚めてもらわなくては話も聞けないですし。

事情も説明してもらえない。

その上見つければそんなことすらさせてもらえない可能性も大。

「…………工房に隠れてもらうしかないのでしょうかね」

溜息を一つ諦めたような声で。

ようやく思い浮かんだ案を渋々選択する事にしました。

「いろいろと貴重なものや危ないものが置いてありますから避けられれば避けたいのですけど……」

他に適当な場所も思い至らない。

何を何処まで知っているのかも、何時目が覚めるかも判らない不

審人物。

他人に預けるどころか、その姿を知らせる事すらためらわせられてしまう。

特に私、後ろ暗い秘密持ちですし。

内心の苦笑を、意図的に表情に作ってしまったてる自分自身がなんだか可笑しかった。

「助かったと言えば、その通りなのですけどね」

もしもアテナに見つけられていたらと思うと、その想像だけでゲンナリとしてしまいそう。

その上調査だなんだと調べられでもしたら、外への抜け道が発見されてしまう可能性だって無くはないのですから。

そう思うと現状はまだややこしくなくて楽なんだと思います。

最もこの人がこんなトコで倒れてさえいなければ、もっと良かつ

たんですけどね。

止められない愚痴を軽く頭の中だけでリピートさせつつ、手は纏めてあった荷物の中から目的のものを。

一度決めてしまえば後は行動するだけ。

想いの内は兎も角、その辺はまあ気の持ちよう次第。

開き直ってしまえば、それだけで結構スイスイと事は進めていけてしまったりするものだったりする訳で。

「問題があるとすれば……」

抜け道への入り口となる穴と手の中の物、それといまだに目を覚まさない彼を順番に見ていく。

「……大丈夫でしょう」

人一人、楽に通り返けられるだけの大きさがあるのは確か。

ただ2人ともなると流石に厳しいと言うだけ。

でもまあ何とかなるでしょう。

足掛かりとして飛び出させている根や岩に引っ掛かったりぶつかったりはするかも……と言うか多分それでの怪我はもうどうしようもないと思う。うん。

「でもまあそれで目でも覚ましてもらえれば後が楽で良いんですけどね」

でもってちょっと思いついた都合の良い理想をおどけた口調を作って言葉にしてみたり。

とは言えコレはコレで紛れも無い本音だった。

正直こうして意図的に冗談色を醸し出さなきゃ本気でしちゃいます。

ただまあ……

でもちよつとぐらいなら……

イヤイヤダメですって。

……

……

でもちよつとくらいなら……

……

……

…

大丈夫ですよ。

ホラ、起きてもきつと事情なんてすぐには把握できないでしょう

し…

怪我だって…すぐに手当してあげれば…

いやいやいやそんな問題じゃ…

……

…

だけど…えつと…

……

……

…

…

「……………まっいいか」

結局そのままその人の身体を穴にそのまま落としてみた。

結果…

まあ何事も…そう上手くコトは運ばないものだったというコトで。

一章 第三話 【腹ペコ娘】

ギッギーッボタン。

少し建て付けの悪い悪い扉を開けると、外からよりもいっそ賑やかな喧騒が耳に。

時はもうすでに夕時。

日も大分傾き始めた頃。

私はようやく本来当初の目的だったこの店に足を運ぶことが出来たのでした。

酒場の兼業で務められている魔導関連系依頼支援幹旋所。

通称魔導ギルド。

相変らずの…否、いつもよりも宵の時間帯に近いせいなのでしょうね。

いつも以上に騒々しい店内の雰囲気。

しかしそんな空気を、今の私は楽しめる余裕なんてなくて。

ただただゴールが目の前にまで迫っている事実には元氣付けられて…後押しされて…

いつもの席………は、埋まっていたのでしかた無しに空いてる三つ隣のカウンター席に腰を下ろします。

途端に崩れ落ちる様に投げ出され様とする上半身。

はしたないと、理性と羞恥で何とか押し留めつつもカウンターの向こうに声を投げ…

「マス…」

「おうっシス今日はまた随分と遅かったじゃねーか。もう来ねえかと思っちまってたんだぜ」

…かけようとした所で逆に陽気な怒鳴り声を飛ばされ。

その衝撃にととう上半身が堕ちます。

「おっおうっどっとうしたんだってんだ。なんか今にもくたばりそうな感じしやがって…っていうかマジくたばってんじゃねーか」

頭上からのマスターの声に何とか右手を挙げて、反応だけはしておきます。

身体はもう…動かせない。

と言うか動かしたくないんです。

行儀とか作法とはもうこの際いいですから。

そんな事よりもとにかく今は…

「マスター何でも構いませんから食事の用意お願いします」

言葉遣いとかいろいろとめんどくさい事全部放り投げて、とにかく今はそれだけ。

「なっ何か本気でマジへばってるみてーだが…大丈夫か？」

流石にココまで来るとマスターにすら心配されるみたいですね。

というか心配してくれるくらいなら一刻も早く…

「大丈夫ですけど大丈夫じゃないです。ただ空腹なだけですので…とにかくお願いしますですよ」

「おっおうつちよっとまってる。おいっ何でも良いから即行で出せるモン頼むッ」

再度の懇願でようやくマスターが奥の厨房の声をかけてくれました。

良かった、コレでようやく食事を取る事が出来るというものです。しかしそう思ってしまった事が悪かったのでしょうか、お腹が…意識が…

……ああ…耐え切れないかも…

「ほら、なんだか知らねーがこいつでも食って繋いどけ」

霞む視界の先に見えたのは小さな小皿。

上に何か載ってますが良く判りません。

でも…今は食べ物でしたらなんでも大丈夫な気がします。とりあえず思うが俤に一つ手につまんで口へ。

…少ししよっぱい。

コレは塩が塗してあるのでしょうか？

コロコロと硬い舌触り…何か木の実の様な感じ。

噛み砕いてみるとふんわりと香ばしい風味が…

「マスターコレなんですか？」

食べ物を口に入れたことでひとまず落ち着けたのか、今食べたコレについて聞いてみます。

皿の上に載っていたのは白っぽい色合いの何かの木の实っぽいですが、コレが何なのか名前が出てきません。

確か見覚えはあるんですけど…。「あ…？なんだシス、

ナッツのわかんねーのか？まあなんだかんだ言ってもお嬢様ってコトか？」

言って豪快に笑う。

そっか、コレがナッツ。

なるほど食べるのは…初めてですね。

でもどうりで見覚えがある訳です。

なにせココ夜は酒場としても兼業してますし、こういったお酒の摘み的な物は頻繁に運ばれてますから。

そう思うとむしろ判らなかつた事が少し恥ずかしいです。

「もーソレぐらい知ってます。確かに初めて食べたけど。ココではしょっちゅう出てるのだからね」

少しだけ恥かしくて、ちよつとだけ拗ねてみせます。

「あつはっはっシスにはまだ酒ははえーもんなっしゃあねーしやあねー」

そんな再度が余計感情を刺激してしまったのか、よりいっそう大声で笑い出すマスター。

私はと言うと、最早口も挟めないと云った感じでただナッツをポリポリ口に入れるだけ。

まったくこの人のこの勢いには。

時々ついてけない時があるのが困り者ですよ。

ちなみにシスというのは外での私の名前。

皆無と断言してしまっても良い程に顔の知られてない私でも、流石に本名のままでと言うのは拙い気がしましたから。

加えてマスターの中では私は良いトコのお嬢様というコトになっ
っているらしいです。

言葉遣いとか仕草とか、庶民のソレとは思えないと…

ただ私からは何も話してはいません。

下手な嘘や誤魔化しはかえって自分の首を絞めかねませんし。

こういう場合沈黙こそが最良の手だってどこかで聴いた気がしますし。
ますし。

もつともソレまでに散々、どう誤魔化そうかとかあの手この手
と頭を悩ませてたんであまり意味もなかったかもですけどね。。

しかも結局どれも空振り。

まともに取り合っても貰えませんでしたし。

まあ流石に事情だなんだは聞かないでいてくれますから、別段
何か問題があると言う訳でもないんですけどね。

むしろ外の街での常識とかはほとんどこの人から教わってたり
します。

そういう意味では恩人であり先生でもありますよね。

「おっ来た来たっ、よしっシスようやく来たぜ。モノは…シチ
ユーと串焼きか、まっ大丈夫だよな」

言って勢いそのままに皿を目の前に並べていく。

毎度不思議に思うんですけど、どうしてこの勢いで料理が一滴
もこぼれないのでしょうか？

依然聞いた時も「んなコト気にした事もねーな」との豪快な笑
い声が返ってきただけ。

もしかして気にするほど特別でも何でもない事かもとは最近の
結論だった。

と、そんな事より今は…

「はいっ全然大丈夫ですっ」

ようやく…ようやく目の前にすることの出来たコレを。

「では頂きます」

手を合わせ、早速口にすることにしましょう。

外ではお祈りを省略しても誰にも咎められたりしないですから
こういうときはありがたいです。

一章 第四話 【依頼品】（前書き）

「ご馳走様でした」

出された食事を頂きひとこち。

手を合わせて感謝の意を込める。

「んっどうもさん」

そしてそれに答えてくれるマスター。

軽い、ちよつとした何時ものやり取り。

「ふふっありがとうございました。美味しかったです」

「へへっそりゃあんだけ腹空かせてたならなんだって上手いさ」

「もう…そういうコトじゃなくて、そうじゃなくてもですっ」

「ああわりいわりい、分かつてるって。後で家内にも伝えたいやるよ」

そして続く軽口の応酬。

「おっおうわりい…んじゃシスちよつと待つとけや」

そこに奥からの声がかかり厨房へと。

誰かの注文の品でも出来た様子、やはりこの時間帯以降はマスターも忙しそうですね。

「っつと私の方も用意しとかないと」

奥に引っ込んでいくマスターを見送ってから私の方の用事も思います。

とりあえずまずは今回依頼を受けてた三点を…。

荷物の中からそれらを取り出してカウンターに並べる。

特に浮遊石に関しては先程彼を運ぶ際に使っているので、ココで改めて不具合が生じてないか再度チェック。

「ん？なんだいやに念入りだな」

そこに料理を持って戻ってきたマスター。

「ん…まあそういう訳じゃないけど、ただちよつとココに来る前に一度使わなきゃならない場面があつてね…：…：んっ大丈夫

みたい」

一通りのチェックも終えて、再び目線を上げると、マスターの方も料理運び終えてきたのでしよう、再び私の目の前に。

「んで、ちよつと遅れちゃいましたけどコレが今回の依頼分ね」

「遅れたつて…期限は今日までなんだし気にするまでもねえだろ。まっなになににせよ了解だ。ホレコツチは依頼料、ちゃんと有るか確認頼むわ」

「了解です」

入れ替わりで渡された袋の中身を早速チェック。

中身は少ない量の金貨。

実際のトコロこんな所で広げるのは普通なら憚られるほどに多いと思われる程の。

まあ依頼品の中に浮遊石があるので相場と言えば相場なのでし
ようけど…。

魔鉱導学。

ソレが今マスターによって検品されている品々に施されている
技術。

特定の物質に、それぞれ定められた様々な力を注ぐ事によって
発現する現象を用い、組み合わせる事によって、望む結果を導き出
す技。

その技術を元に様々な導具を開発、生産する職業に就く者達を
魔鉱技師と言い。

私自身のまたその中の1人として数えられています。

その歴史は古く、旧文明時代の魔導師達の手によって生み出さ
れたと言う説や旧文明崩落の原因となった魔法に変わる新技術とし
て考え出されたと言う説など、数ある説のどれもが1000年、20
00年程度どころか1000年以上の歴史をも示している部分が有つ
たりする訳でして。

故にこそその用途は生活に欠かせないものから全く関わりを感
じさせないものまで多岐に亘り、またそれらの価値も叱りである。

モノによっては銀貨一枚でお釣りがくる様なモノもあれば、金貨100枚をもってしても手の届かないものまでであると私も聞いています。

今回の代金は合計金貨72枚。

加えて言いますと浮遊石はその内の三分の二を占める高額商品。一定領域範囲内の重力の干渉を不可とし、対象物質の重量を一時的にでも0に出来るこの石の効果は、その使用用途の幅広さから値段の割りに結構数の出る人気商品だったりするのですよ。

「うん間違いなく」

「こつちも問題なしだ」

お互い受け取った物の確認を終えて、更に続けてお仕事のお話
「で、何か見つかった？」

主語も何も取り払った簡潔すぎる質問だけど十分通じる一言。

ソレが何を指しているかは以前話してて、そして…

「いいや、全くな。まあ最近目は新しい噂もあまりねえし…すまん」

…一年以上が経った今までもまだ手掛かりの一つも見つけられていない物。

「そつか…」

そして私の答えもまたいつも通りの。

「しかし今更言っても仕方ねーかもしれねーがホントにん名紋在るのか？お前が言うほどに物騒なモン、それ自体は確認されてなくとも似たような噂なり伝承なりは出てきそうなんだけどな」

マスターの言うとおり、確かにココまで捜してコレならその存在そのものを疑問視しても無理ないことなのでしょう。

けどコレばかりは…

「ううん、ソレが在る事だけは確実。昔確かにここに在った物だから、それにアレはそう簡単に壊れたりなんてするものでもないから」

諦めるわけにはいきません。

「……随分と知ってる様な口振りだな」
「……」

私の言葉でマスターの言葉に真剣な重みが。

「それに変に具体的だ。シス…まさかお前その目で見た事すらあるんじゃない？」

「あ…えっとなつ何言ってるんですかマスターってば。そっこそ、そんなわけななっないじゃないですかっ」

「…はあ、やっぱりか。シス下手な誤魔化しは要らん。お前まだ何を話してない下手に隠すんなら俺はもうこの件から手引かせて貰うからな」

決意を込められたと感じられる言葉。

それはマスターの本気を察せられるほどには強い意思表示。

「えっあ…あの…すみません」

マスターの迫力に若干引きつつ、ズズイッと近づいて来るマスターの顔を両手で押し止める。

「わっぷ…んで何処だ何処で見かけた。何時？状況は？何でもいい話せよ」

顔面に張り付いている私の手なんてものもしないで次々に飛び出してくる言葉の数々。

どうにも既に私が実物を見た事が在ると言うのは既に決定事項になつてるご様子。

「あっ…あのえっと…その……」

慌てふためく私と、そんな私のわずかな仕草一つでも見逃さんとはかりに睨んでくるマスター！

傍から見たらきつともの凄く誤解を招きそうな気もするけど誰も気付いてくれてない様子か、静止の声一つ上がりません。

何時もであればそんな誤解無い方が良いのですが、今、今回はかりは痛烈に求めたいです、私。

「さあ言え、正直に全部話しまえ。んじやなきや見つかるもんも見つかんねーぞ」

しかし耳に飛び込んでくるはマスターの言葉のみで、周囲の皆さんからの助力は一言もありはせず。

「あの……えっと……マスター……落ち着いて、ちょっと顔近い」
マスターを宥めようと個人奮闘な私。

そしてその言葉だけは認めてくれましたのか、ようやくその顔が目の前の位置から距離を置いてくれました。

「何でんな重要情報隠してたかってトコは……まあアンタにも色々あるんだろうがな、だがまあせめてココでだけは話せや。本気でソレを見つけないならな」

ホッとしたのも束の間、続けられたマスターの低い声。

状況が何一つ変わってないことに気付かされて冷や汗が流れます。

「あ……あの……その、えっと……」

「少なくともココはそういう場だ。それはお前だって判ってる事だろ、シス」

「……………」

熱さの抑えられた……ただ真剣な声。

言葉の内容は……

……確かに……その通り。

でも……それでも……

「どうした、諦めるのか？」

「っそんな事出来ないですっ」

「なら分かるだろ。確かにお前さんは訳有りだろう。んな事ココに来だした頃から知ってるさ。そしてそれにたいして深くは詮索しないのが俺たちの最低限のマナーだ。だからこれ以上は聞かないでいてやる。だがな、見つけたいなら、探り出したいのなら情報を渡せ。でなきゃ一生このままだ………判るよな」

言葉を最後に後は優しく頭を撫でられ。

マスターの言葉、その仕草、それらは厳しく強引に見えても確かに優しさでした。

故に困ってしまいます。

マスターの言葉が確かに本当ですから。

しかもこうして聞き出したりする行為は本来ならしない事。

話す話さないの選択は常に依頼主の判断で行われ、受け手は催促しないのが常例における礼儀とされるのですから。

にも拘らず、そのことを誰よりも理解してるマスターからの催促。

その言葉に込められた想いが気付けてしまうから余計困ってしまっ。

どうしても話せないこと。

それは確かに存在するのですから。

…あの人もこんな思いを感じてたのでしょうか？…

浮かぶ一人の姿に苦笑が漏れる。

あの時のあの人はどうしたのか…

かつての時に思いを巡らし……

「……マスター……あの……私自身目にした事はないのです」
事実を話す決意をする。

全てではなく、ボール一枚越しに歪曲させたものを…。

相手にボールの存在を気付かせるようにしながら。

一章 第四話 【依頼品】

「ご馳走様でした」

出された食事を頂きひとこち。
手を合わせて感謝の意を込める。

「んっどうもさん」

そしてそれに答えてくれるマスター。

軽い、ちよつとした何時ものやり取り。

「ふふっありがとうございました。美味しかったです」

「へへっそりゃあんだけ腹空かせてたならなんだって上手いさ」

「もう…そういうコトじゃなくて、そうじゃなくてもですっ」

「ああわりいわりい、分かつてるって。後で家内にも伝えたいやるよ」

そして続く軽口の応酬。

「おっおうわりい…んじゃシスちよつと待つとけや」

そこに奥からの声がかかり厨房へと。

誰かの注文の品でも出来た様子、やはりこの時間帯以降はマスターも忙しそうですね。

「っつと私の方も用意しとかないと」

奥に引っ込んでいくマスターを見送ってから私の方の用事も思います。

とりあえずまずは今回依頼を受けてた三点を…。

荷物の中からそれらを取り出してカウンターに並べる。

特に浮遊石に関しては先程彼を運ぶ際に使っているので、ココで改めて不具合が生じてないか再度チェック。

「ん？なんだいやに念入りだな」

そこに料理を持って戻ってきたマスター。

「ん…まあそういう訳じゃないけど、ただちよつとココに来る前に一度使わなきゃならない場面があつてね……んっ大丈夫

みたい」

一通りのチェックも終えて、再び目線を上げると、マスターの方も料理運び終えてきたのでしよう、再び私の目の前に。

「んで、ちよつと遅れちゃいましたけどコレが今回の依頼分ね」

「遅れたつて…期限は今日までなんだし気にするまでもねえだろ。まっなになにせよ了解だ。ホレコツチは依頼料、ちゃんと有るか確認頼むわ」

「了解です」

入れ替わりで渡された袋の中身を早速チェック。

中身は少なくない量の金貨。

実際のトコロこんな所で広げるのは普通なら憚られるほどに多いと思われる程の。

まあ依頼品の中に浮遊石があるので相場と言えば相場なのでしようけど…。

魔鉱導学。

ソレが今マスターによって検品されている品々に施されている技術。

特定の物質に、それぞれ定められた様々な力を注ぐ事によって発現する現象を用い、組み合わせる事によって、望む結果を導き出す技。

その技術を元に様々な導具を開発、生産する職業に就く者達を魔鉱技師と言い。

私自身のまたその中の1人として数えられています。

その歴史は古く、旧文明時代の魔導師達の手によって生み出されたと言う説や旧文明崩落の原因となった魔法に変わる新技術として考え出されたと言う説など、数ある説のどれもが1000年、2000年程度どころか1000年以上の歴史をも示している部分が有ったりする訳でして。

故にこそその用途は生活に欠かせないものから全く関わりを感じさせないものまで多岐に亘り、またそれらの価値も叱りである。

モノによっては銀貨一枚でお釣りがくる様なモノもあれば、金貨100枚をもつてしても手の届かないものまでであると私も聞いています。

今回の代金は合計金貨72枚。

加えて言いますと浮遊石はその内の三分の二を占める高額商品。一定領域範囲内の重力の干渉を不可とし、対象物質の重量を一時的にでも0に出来るこの石の効果は、その使用用途の幅広さから値段の割りに結構数の出る人気商品だったりするのですよ。

「うん間違いなく」

「こつちも問題なしだ」

お互い受け取った物の確認を終えて、更に続けてお仕事のお話
「で、何か見つかった？」

主語も何も取り払った簡潔すぎる質問だけど十分通じる一言。

ソレが何を指しているかは以前話してて、そして…

「いいや、全くな。まあ最近目は新しい噂もあまりねえし…すまん」

…一年以上が経った今までもまだ手掛かりの一つも見つけられていない物。

「そっか…」

そして私の答えもまたいつも通りの。

「しかし今更言っても仕方ねーかもしれねーがホントにん名紋在るのか？お前が言うほどに物騒なモン、それ自体は確認されてなくとも似たような噂なり伝承なりは出てきそうなんだけどな」

マスターの言うとおり、確かにココまで捜してコレならその存在そのものを疑問視しても無理ないことなのでしょう。

けどコレばかりは…

「ううん、ソレが在る事だけは確実。昔確かにここに在った物だから、それにアレはそう簡単に壊れたりなんてするものでもないから」

諦めるわけにはいきません。

「……随分と知ってる様な口振りだな」

「……」

私の言葉でマスターの言葉に真剣な重みが。

「それに変に具体的だ。シス…まさかお前その目で見た事すらあるんじゃない？」

「あ…えっとなつ何言ってるんですかマスターってば。そっこそ、そんなわけななっないじゃないですかっ」

「…はあ、やっぱりか。シス下手な誤魔化しは要らん。お前まだ何を話してない下手に隠すんなら俺はもうこの件から手引かせて貰うからな」

決意を込められたと感じられる言葉。

それはマスターの本気を察せられるほどには強い意思表示。

「えっあ…あの…すみません」

マスターの迫力に若干引きつつ、ズズイッと近づいて来るマスターの顔を両手で押し止める。

「わっぷ…んで何処だ何処で見かけた。何時？状況は？何でもいい話せよ」

顔面に張り付いている私の手なんてものもしないで次々に飛び出してくる言葉の数々。

どうにも既に私が実物を見た事が在ると言うのは既に決定事項になつてるご様子。

「あっ…あのえつと…その……」

慌てふためく私と、そんな私のわずかな仕草一つでも見逃さんとはかりに睨んでくるマスター！

傍から見たらきつともの凄く誤解を招きそうな気もするけど誰も気付いてくれてない様子か、静止の声一つ上がりません。

何時もであればそんな誤解無い方が良いのですが、今、今回はかりは痛烈に求めたいです、私。

「さあ言え、正直に全部話しまえ。んじやなきや見つかるもんも見つかんねーぞ」

しかし耳に飛び込んでくるはマスターの言葉のみで、周囲の皆さんからの助力は一言もありはせず。

「あの……えっと……マスター……落ち着いて、ちょっと顔近い」
マスターを宥めようと個人奮闘な私。

そしてその言葉だけは認めてくれましたのか、ようやくその顔が目の前の位置から距離を置いてくれました。

「何でんな重要情報隠してたかってトコは……まあアンタにも色々あるんだろうがな、だがまあせめてココでだけは話せや。本気でソレを見つけないならな」

ホッとしたのも束の間、続けられたマスターの低い声。

状況が何一つ変わってないことに気付かされて冷や汗が流れます。

「あ……あの……その、えっと……」

「少なくともココはそういう場だ。それはお前だって判ってる事だろ、シス」

「……………」

熱さの抑えられた……ただ真剣な声。

言葉の内容は……

……確かに……その通り。

でも……それでも……

「どうした、諦めるのか？」

「っそんな事出来ないですっ」

「なら分かるだろ。確かにお前さんは訳有りだろう。んな事ココに来だした頃から知ってるさ。そしてそれにたいして深くは詮索しないのが俺たちの最低限のマナーだ。だからこれ以上は聞かないでいてやる。だがな、見つけたいなら、探り出したいのなら情報を渡せ。でなきゃ一生このままだ………判るよな」

言葉を最後に後は優しく頭を撫でられ。

マスターの言葉、その仕草、それらは厳しく強引に見えても確かに優しさでした。

故に困ってしまいます。

マスターの言葉が確かに本当ですから。

しかもこうして聞き出したりする行為は本来ならしない事。

話す話さないの選択は常に依頼主の判断で行われ、受け手は催促しないのが常例における礼儀とされるのですから。

にも拘らず、そのことを誰よりも理解してるマスターからの催促。

その言葉に込められた想いが気付けてしまうから余計困ってしまっ。

どうしても話せないこと。

それは確かに存在するのですから。

…あの人もこんな思いを感じてたのでしょうか？…

浮かぶ一人の姿に苦笑が漏れる。

あの時のあの人はどうしたのか…

かつての時に思いを巡らし……

「……マスター……あの……私自身目にした事はないのです」
事実を話す決意をする。

全てではなく、ボール一枚越しに歪曲させたものを…。

相手にボールの存在を気付かせるようにしながら。

一章 第五話 【理由】

一つは属性万象説。

この世界に存在する総ての物はある例外を除き、二つ以上の属性を有し、その性質を決定していると唱えられる説。

一つは属性相関理論学。

全ての属性は幾つかの例外を除き、それ単体での存在ではありえず、互いが互いに影響しあう関係性を持ち、その影響力の方向性と強弱、そしてその種類から法則性を見出し、各属性を分類選別し表す事を基礎とする学問。

この二つの思想が魔鋤導学の基礎理念であり、その根底ともなっているモノである。

そしてその例外として記されている存在の一角。

それは…

「死の単体純正属性の神具とはな…まさかそんな依頼を知らずにとは言え受けてたなんぞ、驚きを通り越して呆れさえするわ」

私の話を一通り聞いてのマスターの第一声。

気遣いも取り繕いもない素直な感想。

確かに無理矢理話させられはした。

隠しきれるとも誤魔化しきれるとも到底思えなくて結局正直に話してしまった。

途中途中…否、きつとそう決めたその瞬間から、早まったかな…

とはずつと感じてましたけれど。

とはいえ話してしまったものはもうどうしようもありません。

ここはもう開き直った者勝ちかと、ほとんど悩む事そのものを放棄しちゃってます。

だって開き直るってこういう事でしょうしね。

幸いさすがのマスターにも動揺がはつきり見えますしなんとなく

心の内も、本当になんともなくですけど分かるような気も…

正直な感想、聞き出した本人としてどう対処したものか困っているのだろうかと思っっている。

何せ物が物ですし…

本当ならこんな場所に出てきて良い単語ではないのでしょうか。

神具とはそれほどまでの存在。

神具とはかつて栄えていた旧文明の遺産の代表格。

前述にて語られていた属性万象説の例外的存在。

唯一つの属性のみを有し、形にされた道具。

その力は単純ゆえに強大で、単体ゆえに他からの干渉を受け難い。現存の技術力では生成不可能であり。

故に遺跡等からの発掘品のみが唯一の流通。

一攫千金を狙う多くの冒険者が求めて止まない遺跡探索のお宝で間違いなく頂点に在る存在。

物によつては国家すら動かし。

しかもそのレベルに在る物は少なくはないと言わせられるほどの物。

正直、自分が逆の立場だったら、間違いなくどう扱えばいいのか判らなくなつてたでしょうし…

「……………」

というかそんなマスターに対してすらどう言葉を返せばいいのか正直今この瞬間にでも教えて欲しいです、私自身結構本気で。

「で、んな物騒なお宝を手に入れて何がしたいんだ。お前は」

「……………」

「まあ情報源が王宮のしかも皇族管理の秘蔵書籍だったのには…
…まあソコに入れるシスの身分も含めて驚いてるが。んなこたあ今はまあどうでも良いつ。とりあえず最低限コレだけでもまずは答えろ」

いくつか無視出来なさそうな言葉もいくつかありましたけど今はまあ…

凄味のある、マスターの明らかに本気と判る言葉。

「何がしたい。何をする気だ。まさかクーデターでも起こす気なんじゃねえだろうな」

内容は無茶苦茶過激だが冗談なんて感じ微塵も感じさせない。

事、今回の事に関して言えば当然かもしれない反応。

神具に対して国が動くというのはそれだけの力をその一つ一つが有しているが故。

しかも私が求めているソレは源祖12属性の一つに数えられる程のモノ。

【死】属性神具。

使いようによっては国一つすら滅ばし尽くせる。

それは誇張でも何でも無い。

圧倒的なまでの現実。

マスター以上にそれを知ってる私だからこそ断言できるコト。

マスターの言葉。

それが冗談の様でありながら、しかし決して的外れではないことを。

「……違います。そんな事望んでない、絶対にそんな事…考えもしたことありません」

だからこそ私も断言する。

真っ向から否定する。

それが、それだけの力を有している事を知っている者として。

「じゃあ何のためだ。御家復興やら発言力の強化てな理由でもないんだろ。んな事あるか無いかもわかんねえ神具なんざ頼りにせんでもシス、おまえ自身が持つてる魔鋤技師としての技術力だけでも十分過ぎるカードになるのだろ」

「……………」

私の否定を飲み込んだ上で更に真意を探ろうと可能性を狭めさせられる問い掛け。

自らの持つカードを惜しげもなく切り、私に逃げ道など見つけさ

せないばかりに。

確かに神具にはただ所有して居るだけでも周囲に与える影響力は大きい。

使わずともその存在をちらつかせるだけで威嚇になる。

相手を牽制することが出来る。

「御家の事とか…お前も色々めんどくさいもん抱えてそうだったのは…まあなんとなく感じてたからよ。今までは俺も触れずにいたが…今回はそうはいかねえ」

私の事を訳在り貴族の家の者と勘違いしてるのは昔から。

「さっきの話からだけでも相当な立場に居たのは判る。んなお前が今ココに居る理由まではさっぱりだが、それだけの事があつたつてのは…まあ俺でも想像できる」

「……っ！」

マスターの言葉に自身の内にわずかばかりでは在りますけど動揺と後悔が過ぎます。

失策だったかもしれません。

情報源の所在場所として皇室管轄の図書室の名を出した事は。

皇室管轄とは皇族が直接管理している場の事。

ソコに足を踏み入れられること、それはすなわち皇族に直接認められている者であるという事に他ならないのですから。

詳細な部分までは判らなくても様々な情報網を持つマスターのこゝと、真実と遜色ない程度 of 理解はもっていると見ても良いと思います。

「正直に話せよ。話さないつてのはまあ論外として、もしも少しでも嘘を感じさせたら本気で手を引かせてもらう。それだけじゃねえ、今後取引全部断らせてもらうからな」

「……………」

本気だと感じます。

決別を予感させる意思表示。

それはたんなる商売上の取引相手の関係などではない、もっと深

い部分での関係の探りあい。

知人…否、友人としての宣言。

口に出されなくてもいやというほど伝わってくる覚悟と信頼。
でも…

「……………」

…どう言えば良いのか私自身判りません。

正直なところ、明確な目的なんて無いのです。

信じられないと思う。

信じられるはずが無い。

ただソレを手にする事のみが目的だなんて。

そしてその先は……

「まあ俺もお前さんとはそう短くない付き合いだと思ってるし、シスの性格も大概理解してるつもりだ。妙に世話焼きなくせして人に頼るのが下手なところなんて特にな」

「……………」

「だからまあ誰かを庇ってとか、口止めされてつても多分にあるんだろうから全部とまでは言わんさ。だがな、それでも何も話さずにじゃ俺も納得できねえ動くこともできねえ。だから話せる分だけでも話してくれや。ただそれでも……」

——嘘だけはつくな。

言いたいことは全て言い切ったのか、マスターはその言葉を最後にただ私のほうをじっと見据えるのみとなっている。

他からの声にも一切耳を貸さず、ただ私の言葉のみを待って。

周りの皆さんもまた雰囲気を感じてか、一時、ココは奇妙な空白の場となります。

ただ、私の言葉を待つのみ…

「……だっ誰に頼まれたとかそういうのじゃないんです…」

ソコまできて…

ココまでしてもらって…

…私はようやく自分から口を開くことが出来た。

「ただ私が…私の我侭なんです」

ソレを手に入れて何かしたいなんて事は無い。

そんな事態永遠に起きなければ良いとさえ思ってます。

でも…

「アレは私が知ってる唯一の手段なんです。いつか…いつか起きかねない事態に対しての…」

あの時はダメにしてしまった。

折角のチャンスを私がふいにしてしまった。

「使う機会なんて訪れなければ良い…訪れてはいけないのです。でもそれでも私は知ってますから…起きる可能性を…止める術を…だから……」

だから今私がこうして在れる今出来る事をしておきたい。

その時が何時訪れるか判りませんけど…

数年後か…

数十年後か…

はたまた数百年先となるか…

もしくは永久に訪れることが無いか…

それは判りません。

誰も知らないこと。

あの時とは違う。

ここには…あの人は居ないのですから。

私は…あの人の様にはなれないのですから。

一章 第六話 【信頼】

「ったく、やっぱなんかえらいモン抱え込んでるじゃねえか。ホントシスらしいっちゃあらしいんだろうけどな」

ソレまでの硬さが一気に解けたかのような柔らかな声。聞こえてきた言葉に顔を上げるとマスターと目が合う。

「実際のところ俺としてはその使う機会つてのも聞きたい所なんだが…今回のところは勘弁しといてやるか」

「あの…マスター」

そう一瞬思ったがちよつと違つてた様子。

マスターは確かにコツチを見てる。

でも…

「えつと、マスター？」

再度呼びかけても応答はなし。

よく見てみると視線も何処と無くずれてる様な気が…

あ…もしかして…

軽くマスターの顔前で手をフリフリ。

「…反応無し」

やっぱりマスター…

「…つてうおいシスお前何してんだよ」

と、ココで一拍送れてマスターが戻ってきた。

「マスターまた自分の世界入つてたよ。まったくもう人が折角真面目に話してたつて言うのに」

そう言つて軽く頬を膨らませてみせる。

「えっあ…あちゃゝまたか俺。スマンスマン、でもまっ話はちゃんと聞いてたぞ。うんそれはホントに」

そしていつもの様に笑つて誤魔化そうとするマスター。

そうこれはまあいつもの事。

そういつもの…

なんと言つかマスターの癖みたいなもの。

本人も自覚しててコトある事に直したい、どうにかしたいとは言っ
ってはいるけど…

何かしてる風には見えないからいつも変わらず。

だから周りの皆も判ってて…

結局繰り返し返される日常の一幕。

当たり前ないつもの事。

でも今この瞬間におきたコレには感謝したい…と思う。

お陰で余裕が持てたから。

日常を…いつもの私を思い出せたから。

「もう本当に聞いてたんですが？私もう一度同じこと言えって言
われても言いませんからね」

だからこうした軽口も言えるのです。

「ああ、ああ大丈夫だつて。判ってる、一度だけで十分だ。これ
以上…まあ言わせるなんて酷なことしねえよ」

でも…マスターの最後の一言でいつもの私にヒビが入る。

「言っただろ。ちゃんと聞いてたつて」

いつもと変わらない調子の…

でも重さのある言葉。

「ん？どうした」

ただそう感じてるのは私だけかも…

そう思わせそうな程にいつもの調子なマスター。

「あの…それで……」

その態度が分かりません。

マスターの内情が良く見えません。

だからココから話を進めるのが怖い…です。
でも…

それでも…

「やっぱりもう無理ですか…」

…覚悟は決めていたはず。

マスターは言ってた。

説明しろと。

訳を話せと。

嘘を付くなど。

納得できなきゃこれ以上協力できないと。

言っていたのです、確かに。

言ったからにはマスターは実行します。

そういう人だというのはコレまでの付き合いで分かってるコトです。

そして私の言葉はマスターが望んでるものから大きくかけ離れていることも。

理解している。

ですから…

「すみません…これまでありがとうございました」

これからは私一人で…。

「おいおいなに1人完結してやがるんだ」

「……え？」

場違いなほどに明るい声色に思考が再びマスターの方向へ。

「誰が手を引くつて言ったよオイ。まアココまで来ちまったてで途中退場なんざ後が気になって仕方ないしな。それに結局何も聞かせてもらえてないんだ。このまま置いてけぼりなんざ、たまったもんじゃねえよ」

呆気にとられている私の頭にマスターの大きな手が乗せられる。

「それにな…言ってただろ、お前の性格は大概判ってるつて。嘘のつけないトコとか、妙に生真面目…っか融通の利かないトコとか。それになによりイヤツつてのもな。だから結局の所無理にでも話そうとしてくれた時点で俺的には合格な訳よ」

上機嫌に、まるで悪戯の成功した子供の様な調子で。

「まっ確かに嘘はつかれちまったが、バレバレなんだからあんま意味ないしな」

勢いのままに力強く頭を撫でられる結果に。

「あつわわわつあわわつ」

撫でられるといつてもそれはあくまでマスター的感覺。

私からしてみれば頭を振り回されると言つた方が正しい感じで…

「あははははっどうしたシス、いつまでも呆けてんじゃねえよ」

ガハハツと更なる勢いで頭ごとガクガクと振り回され…

「あつわわわつちよつやめ…」

流石に堪らず身を反らし。

瞬間…

「…きゃわつ…」

椅子ごと倒れ落ち…

「……っ！っ！……！」

ちようど良い感じの角度で床に後頭部を強打。

暫く悶絶する事と…。

と言つか痛みと衝撃に転げまわること暫く。

「あつ…えつとなあ…その、シスわりい大丈夫か？」

そんなマスターの声に「大丈夫な訳がないでしょうにっ」などと

心の中で思いつきり反論しながら。

言葉に出さないのは…

言葉に出せないほどな状態だっただけで…

それ以外なんにもないんですからねっ。

「でも本当に良いんですか？」

あまりの展開に再度確認の言葉を重ねる。

けっしてマスターの乱暴さやらソレによつて生まれた自分の中の

憤りを誤魔化す為の取っ掛かりとかとは全然考えてないですからっ。

なにせマスターはやると言つたら本当にやる人なのですし。

それは私だつて十分実感してたりする事実。

マスターの言葉じゃないけど私だつてマスターとの付き合いでそ

の性格は多少なりとも把握はしてるもの。

ええそうですとも。

そりゃあもちろんマスターに比べたらまだまだかんですが…

だから本当に諦めてました。

でも…

「おうついいぜ。だがまっ情報の取捨選択はさせて貰うことにはするがな。世間知らずなお嬢様に下手な情報流して暴走されちゃたまんねえしなっ」

ガハハと笑いながらいつもの軽い調子。

「せつ世間知らずって、私そんなじゃっ…」

「イヤイヤ俺から見たらまだまだ世間知らずだぜお嬢様。まっ俺を出し抜けるぐらいしたたかになれたら多少見直してやるけどな」
そう言い再び頭を数度叩かれる。

本人にしてみればポンポンと軽い調子なのでしょうけれど…

私からみればそんな軽い調子には捉えられない。言ってみればドムドムといった感じ？何気に込められる力が強すぎです。

「でもまっ確かに嘘は吐かれちまったしな。ココは一つ罰を一つてな事で赦してやろう」

マスターからの攻撃？に耐えてる私の上では1人どんな話を都合の言い方向に勝手に進めだしているマスターの声。

「ちよちよつと罰つていったい何さっさせようていうの？」

適度に続けられてるマスターからの攻撃？のせいで軽くつかえながらもそれでも歯止めの言葉を。

以前一度だけど、マスターの悪ふざけに巻き込まれて大変な目にあった経験が脳裏を過ぎる。

「ん？ああ別にそうたいした事でもねえよつ。元々お前さんに頼もうと思つてた案件だしな」

「もつもともとつてあついったいななに…あーっもういい加減その手止めてくださいッ」

何とか無理矢理話しの方に集中しようと思つてたけど流石にもう堪えきれなくなった。

思いつきり頭を振って手をどかせると、ギンとマスターを睨め

つけてやるですよ。

「おおっこわいこわい」

対したマスターは余裕満面。

少しぐらいビクリしてくれてもいいのに…ちょっと悔しいです。

「で、何？頼みたい用事って」

自分の中の気持ちを無理矢理押しつぶすように話を強引に戻す。

「おうそうだな…ククク。まあ当人たちに聞いてもらいたいし、急だが明日いつもぐらいの時間に大丈夫か？」

話し振りからして本来なら今日その当人たちに合わせようとしていた感じ。

今日来る事は依頼の関係上マスターも判ってたでしょうし、いつもなら大体昼過ぎぐらいに決まって顔を出してたから。
しかしながら今回は間が悪かった。

そして更に言えば…

「あの…マスター私明日はちょっと…」

工房に転がしてきた1人の事に思考がいく。

「あっちゃーそれじゃしゃーなーわな。で、いつが都合付く？出来れば早くしてやりてーんだがよ」

都合？

「えっ……と……」

彼に関しては一日で…いやいやもしかしたらというコトも考えられるし…

でもマスターの方も…

「そっそそれなら…多分三日後ぐらいまでには…」

「よっし三日後だな。判った、連中には伝えとくから。まっよろしく頼むわ」

言いながらもマスター上機嫌に再び私の頭をドムドムと…

私はというとマスターの攻撃？に耐えつつも、とりあえずこれ以上事態がややこしい事態にならない様願うばかりだったりするのですが…。

どうにも嫌な予感がするのですよね。

外れてくれればいいのですが…

こういった類の願いが天に聞き入れられることが稀と言つのも事実。

本当に、これ以上の面倒事は勘弁願いたいです。

それはもう心の底から本気で。

一章 第七話 【簀巻き】

マスターに別れを告げてそれから。

特にのんびりしてた訳ではありませんでしたが、帰路に着いたのはいつもよりもかなり遅い時間帯。

職人街の一角に建てられているもう一つの我が家。

工房に辿り着いた時にはすっかり日も落ちきった時となっていました。

日が隠れ、闇が主役となるこの時。

周囲の家々から漏れるオレンジ色の灯りがわずかにその周囲を照らしているだけの世界。

その中で私は、少しばかりの緊張を持って目の前の扉を睨んでいます。

何時もであれば何を感じるわけでもない当たり前の場所。

なのに今はソレが全く違って見えてしまうから不思議です。

夜と言う闇がそう見せているだけか。

それとも中に在るであろう存在ゆえにか。

多分答えは両方で、それでもその多くは後者が占めているような気がします。

まあなんとなくですけど。

そして私は扉に手を。

普段なら無縁の緊張感。

何時もなら無用の警戒心。

多分今日だけ、今だけの…

鍵を外し。

扉を開ける。

そこに何の特別も感じられなかったけど、感じる胸の鼓動は荒くなってる気がします。

願わくば…

そして…

扉の先…

普段よりも格段にがらんとした家内に…

簀巻きが一つ転がってました。

「…………ふう…………」

出た時とそのまま変わらず在る目の前の光景にまずは一息。

それで緩みそうになる気を再度引き締め慎重に中へ。

目に付く反応は見られません。

暴れてたかの様子もないですし、緊張感の様な張り詰めた空気も

…………私自身のソレ以外感じられない。

「もしも…………」

意を決して、一度試しに声をかけてみる事に。

「起きてますか…………」

更にもう一声。

護身用にと戸口に立てかけてあった棒を掴み…………

「寝てますよね…………大丈夫ですよ…………」

声をかけつつ一歩一歩距離を詰めて行く。

そしてそつとその顔を覗き込んで…………

「……………」

なんと言いますか、こんな状況で可愛いかもと思ってしまつ私はちよつとばかり変なのでしょうか。

「いやいやいやそんなじゃなくて…………」

気を取り直して持っていた棒でその身体をツンツン。

軽く突つついてみて反応なし。

次いで痛くない程度に軽くペシペシ。

叩いてみても結果変わらなくて。

「まだ本気で目覚めてないみたいなのです…………」

ふ…………と全てを吐き出すように張り詰めていた神経を意識して緩める。

「まったく…………どうしてこう今日は厄介な事が次から次にと…………」

ココに来てドツと押し寄せてきた疲労感。

思わず愚痴が出てしまうのも仕方ない事だと思いますよね。

そりゃあ私だって嘆いてたって何も変わらない事ぐらい判っていますよ。

でも、だからって止められるものじゃないですよ、ホント。

「しっかし…本当にどうしましょうか？この人」

三度ツンツンと棒で突つつきつつ、今最も厄介そうな問題に目を向ける。

常識的に考えれば衛兵の詰め所に突き出すかすれば良い所なのでしようけど…

何もかも全部一気に放り出せるというコトには凄く惹かれますけど…

見つけた場所が場所ですし、普通にダメダメです。

絶対今以上の面倒事になって返って来るに決まっていますし。

それだけは勘弁。

せめて私自身の立場の安全だけでも最低限は図っておきたいですから。

「なんにせよこのままというのも、ちょっと拙いでしょうし」

何はともあれまずはこの人を簀巻き状態から開放してあげる事にしましょう。

相手が何者であれ、下手に敵意を感じさせるのは良策とは思えません。

警戒はされないに越した事はありませんから。

まあ襲い掛かられる可能性も無くはないですが。

身を守る術ぐらいの心得はありますから、問題は…多分ないでしょう。

ちよつと楽観的かと思いますが、このままでいてもどうにもならないですし。

「……………」

そーっと。

「……………」

慎重に。

「……………っん…」

「……っ!」

何かきっかけになったのでしょうか。

それとも自然になのか。

ココまで反応らしい反応のなかった彼の突然の声に間合い以上の距離を飛び退る。

「……………」

ジツと様子見。

しかしそれ以上の何かはなく、ただ少し窮屈そうに身動きをしただけ。

眠りは思ってたのよりか浅いよう。

コレはより慎重にコトを運ばねば起こしてしまいかねないと、覚悟を新たに間合いを詰め直す。

気配を察知して、とか言う人じゃなさそうでソコはちょっと安心しかして再度この手をロープに手をかけようとした瞬間。

「……………」

「……………あっ」

今度は何の前触れもなく、特に特別な何かも感じさせないまま。

極々自然な調子で。

彼の瞳が開かれた。

「……………?」

ぼんやりとした寝ぼけ眼が目の中の私を捉える。

「……………んんっ?」

不思議そうな眼のままにとりあえず身を起こそうとしたのか身動き。

結果全身を圧迫し続けている違和感に気付いたか。

「……っ?……っ!?」

何とか唯一自由に動かせる首をブンブン巡らせ自身と私を交互に

見やつてくる。

その表情かなり混乱してるご様子。

まあそれは無理もないかも。

なにせ気付いたら見知らぬ場所で簀巻きになってるんですから。

普通に冷静じゃいられない状況ですよ。

なんて、ちよつと当事者であることに目を背けてたらいつの間

に彼の動きは前後左右に激しくに変化。

戒めを解こうとかなり必死な様子。

下手に暴れてもそうそう解けるなんてコトある筈ないです。

というか少し落ち着いてくれなきゃ近づいても出来ないじゃないですか。

そんな私の…あまりに空気違いな現実逃避。

判つてはいるんですけどね。

「□□□□っ！」

絡みつくロープに悪戦苦闘しながらも彼が立ち上がった………つて！

「あつあのちよつと…」

突然な事に驚き声が出る。

小さなきっかけ。

だけどそれでようやく私は現実にもまた目を向けられた。

ナイフか何かでも持っていたのだろうか。

いや、でもココまで運んできた時にはそんなもの見当りはしなかった。

ならならそういう技能でも持っている人？

たしか縄抜け？とか言いましたっけ、大分昔に読んだ物語にそん

な人が出てきてた気が…。

でもそれって本当に出来るものなんですか？

曖昧な記憶にある表現描写では自分で自分の関節を外して…なんて、あきらかに無茶苦茶っぽいことが書かれてた気がするんですけど…。

それでも頭の中を駆け巡るは困惑と混乱の思考の嵐。

なんとさえいいか判らない。

どう行動すればいいのかも判らない。

でも…

事態はそんな私を待つてはくれないで…

それ所かただ一瞬一瞬の時すら惜しむように進んでいく。

鈍く激しい衝撃。

気づいたその時、私は目の前の彼に押し倒されていた。

一章 第八話 【対峙】

一瞬と言うには少々長すぎる間。

私は自分自身に何がおきたのか理解出来ていなかった。

ソレはけっして突然のことでも、唐突な事でもなかった。

冷静に対処していれば…

否、たとえ多少慌てふためいていたとしても、なんらかしらの手は打てていた様な状況であつたはずだと思う。

けして油断してた訳ではなく…

むしろ警戒心と共に身構えていたはずでしたのに。

でも…

「□□□□！□□！？」

現実はその思うままに進んでくれなくて。

私は目の前の彼に完全に組み敷かれていた。

乱暴な力で襟元が引張られる。

何か叫んでいるようですが上手く聞き取れない。

「ちよっ…ま…はなし…てっ」

恐怖と焦燥に駆られたまま。

自身と彼の間の空間に魔力を込める。

魔道力学の基礎中の基礎。

通常空間内における空爆反応。

瞬間、2人の間の空気が数十倍に膨張。

目の前の彼をその勢いのままに吹き飛ばした。

「ケホッケホッ…あ、あなた一体…突然なんなの…一体なに」

首元を襲う圧迫感に耐えつつ声を絞り出す。

怖い。

嫌だ。

助けて。

湧き上がる感情を出来るだけ気付かないよう。

「□□□□!!」

私の懇願も聞き入れてもらえない。

もしかしたら聞こえてないのかもしれない。

目の前の彼もまたかなり興奮状態にある感じですし。

しかしそう感じる事でかえって冷静さを取り戻せ初めている自分も自覚できる。

人間、傍らにいる者が混乱していればしているほどかえって冷静になれると何かの書物であった気がする。

そして今実感してる事実。

先程まで溢れんばかりに湧き上がってきた感情の本流が今は穏やか。

無論無くなっただけでも小さくなっただけでもない。

強いて言えば浸されているといった感じでしょうか…

恐怖も困惑も拭いきれるレベルでは到底ありえない。

ただそこに激しさはなくなっている。

たぶんですけどそんな感じ。

「……っ」

そしてそうなれた事で初めて外界を認識できるようになる。

今は目の前の彼。

距離を取り、過剰とも見て取れるほどの警戒心と共に睨みつけて

くるその人を私も見る。

その心情は見るだけでも判るほどにあからさま。

余裕がない証拠。

まあ状況を顧みれば当然の反応とは思うところですけど。

気が付いたら見知らぬ場所で拘束状態。

しかも正体不明の何かで自分を吹き飛ばせるような私という相手付き。

どう鼻肩目に見ても気を抜ける要素などありはしないでしょう。

でもソレは私も同じ。

どれ程優位な立ち居地に身を置いていようと、その足元は薄氷

の如く薄く脆い。

ただあの場所に居たという事実。

ただそれだけで私にはほぼ詰みに近い位置まで追い詰められている感が拭えないから。

でも、だからこそこれ以上踏み込まれるわけにはいかない。

相手に対して先に冷静さを取り戻せたのは幸運でした。

力と勢いのままに迫られたのもまた幸運。

ソレが通用しないと思わせることが出来ましたし。

その為の手段が相手にとって正体不明なのだとしたら、それもまた幸運。

例え知られていたとしてもそれはそれで牽制になるものですし。

しかしこのままでは拙いのは彼だけでなく私もそう。

「……………」

今はもう叫ぶ事も無く、ただこちらを睨むのみの彼へと思考を向ける。

彼もまた冷静さを取り戻したか。

まだそうではないか。

それともコレまでの全てが私を欺く為のものか。

あまりに情報不足。

あまりに認識不明瞭。

故に、最善は…

「あつあのっ…あなた一体何者なのですか。一体どうして……いえ、どうやってあの場所に入り込んだんですか」

求めるは情報。

素直に話してくれるかなんて期待できない。

下手な刺激になって、また襲われるかもしれない。

でも黙ったままのにらみ合いで何が変わるとも思えない。

ならばの一手。

「わっ私はシス、あの杜の管理を任されているものです。故に尋ねます、あの場所はむやみやたらと人の立ち入りが赦されるような

目の前の彼もまた似たようなものでしょう。
それでも彼の言葉は判らなかった。

聞き覚えのない言葉。

自分の知っている言語とはまるで違うソレ。

無論意味など判るはずもなく。

そして同時に目の前の彼もそうなのでしょう予想は付く。

だけど…

「あ……えつと、あの……」

知らない言語。

知識にない言葉。

…………… 本当に？

戸惑う。

瞬間、浮かんだ思考が心を更に波立たせる。

うつん、そう、そんな筈はないです。

間違いなく聞いたこともない言葉。

それにそれだけじゃありませんこの感じるは…

若干色の付いた肌の感じから、大陸中央近辺の人種であろうコトは予想がつくのですけどそうなるとこの言語形態に違和感を。

このアスカルディアをはじめ、この広大な大陸には国も言葉もいくつかの形態が確かにあるが、文明と国交が遙か昔より深い結びつきを持っていた為か違いと言う違いは普通であれば感じられない程度。

せいぜい独特の言い回しや訛りなどが見られる程度で、多少大雑把な見方をしてしまえば同じ言語と見ても差し支えないですし、現にそう示唆する学説もあるのだから。

例外があるとすれば南海の諸島国家の小国家の幾つかか、北方の封国ぐらいのものなのですが、それらの国の者たちとも違う。

気候の違いからか一目で見て判るほどに容姿に差がある。

南方の者たちは褐色から黒色の肌、男女共に全体的に大柄でガツシリした印象が強い。

北方の者たちは南方の者たちにくらべたら見事なまでに真逆の印象。透き通るほどに白い肌に小柄な体躯。

目の前の青年はそのどちらでもない。

見慣れた特徴の人種。

それにそもそもこの者の言葉、それらの他国家のそれともまた違っているのですから。

「あなた……一体何なんですの」

ふと恐怖にも似た悪寒を感じる。

ありえない者。

理解できないもの。

未知なるモノ。

気付けばあまりに不自然なこの者。いるはずのない場所に居て。

聞くことなどない言葉を話し。

見たことのない衣服で身を包んだ…。

…そう、今見ればその衣服もまた奇妙としか言いようのないもの。ファッションになど全く気にかけたりしていない自分。

流行の行方など気にかけたこともない自分ですが、それでもその装束は奇妙に感じられた。

多少くたびれ色あせてはいるけど白一色の身体にフィットした感じの衣装。

町並みの中でも王宮内でも見た事がないような…更には物語に出てくる架空の衣装ですら似通ったものが思い浮かばないソレ。

「一体何者なんですかつ」

言い知れぬ恐怖から身構えた腕に力がこもる。

語気も抑えなれない。

それらがただ相手をいたずらに警戒させるだけだと判っていても止められない。

事実、身の危険を感じたか目の前のその彼は次第に後ずさり始める。

つられる様に私も少しずつ前へ…その距離を詰めていく。

緊張感は留まる事無く高まり。

意識する事無く感情は興奮に高まり。

けっして永い訳ではない…しかし途方も無く感じられた瞬くほどの時間の先。

ついに感情の臨界が溢れた。

どちらが先に動いたかはどちらにも判らなかった。

ただ目の前の彼は身を翻し背後の窓から外へと逃げ出し、私は捕らえ押さえつけ様と一気に足を前に踏み出し…

爪先から突如襲い掛かってきた貫く様な激痛が身を固まらせた。

不意打ちの様な激痛。

それに襲われた瞬間、声を上げ事も身を悶えさせる事も出来ない…なんて、一瞬関係はあるけどどうでもいい思考が頭を流れる。

一拍。

「……………っ！！」

瞬間の硬直の影響のままにギクシャクとした動きで蹲り、激痛の発信源である足の小指を押さえる。

「あっあっあ…なん…でっこんなタイミングでっ」

痛みの余韻の為に奇妙に語氣に力が籠る。

でもそれでもと、なんとか頑張っつてヒョコヒョコといった感じで前へ。

窓枠から身を取り出すものの、日の光もすっかり落ちてしまった闇夜の中に望む人影は見つけられなかった。

「まっ…たく、ホント、なんなんですか今日は」

これまでの人生において最大最悪の厄日だとつくづく思う。

正直素で泣きなくなっていたり。

「ホントいい加減にしていたきたいですよ」

一章 第九話 【情報屋】

嘆く事数瞬。

何とか気を奮い立たせて、再び魔導ギルドへと足を走らせた。あの彼を取り逃がしたのは痛いですが、スグサマ行動できなかったあの痛打は多少なり冷静に思考を流せるくらいに頭を冷ましてくれていた。

こんな街中を我武者羅に捜し回る愚に気付く位には。

そして確実に見つけ出す為の手段に思い至らせるくらいには。

「マスターいらつしゃいますっ」

店内に入るなりマスターを呼ぶ。

店中の注目が一気に集まって恥ずか…いいえっ今はそんな事気にしてられません。

一瞬動悸が跳ね上がったのや、逃げ出さなくなった衝動については今はまとめてスルーの方向性で。

ひとまず余計なことは一切合切全部無視しつつカウンターへと身乗り出す。

「おっおいおいシス一体どうしたんだってんだ、んなに慌ててよ。っーか今さっき帰ったばかりで…なんか忘れ物か？」

突然の事ではあってもいつもどおりのマスター！。

「いいえそうじゃなくてですねっ」

普段は当たり前なその態度が少しいらしてきます。

判ってます、これが単なる八つ当たりだなんて事は。

ええ判ってますよ。

でも…それでも少しは…

「まあなんにせよ少し落ち着けて。ちょっと待ってるよ今なんか飲み物持ってきてやるから」

少しは察して欲しいと思うのは、たぶんもうどうしようもない感情。

「待つて下さい。飲み物はいらないです。そんなのよりも依頼
お願いしたいんです」

悠長なマスターの振る舞いにイライラする。

今この場にいる自分に不安がある。

本当にこの選択が正しかったのか。

他に何か取る道があったのではないか。

こんな所で…

ソレよりも自身で追った方が…

気が逸る。

今すぐにでも飛び出したくなる気持ちを必死で抑える。

何故ココまで気が急くのかは判らない。

でも…ココで飛び出したらココまでの時間が無駄になるのは判
りますから。

だから…少しでも早くココで為す事を。

「なんかあったのかって…：まあ訊くまでも無いが。判った、
で何をすればいい」

ココまで来てようやく本題に入れます。

ようやくです。

でもまずは一つ深く深呼吸。

心を少しでも落ち着けた気にさせてから。

自分が興奮してる事ぐらい、苛立つてる事ぐらい、頭では判っ
てるつもりですから。

「…：人を捜して欲しいんです」

成すべき事の最善を。

「…：」

私はいつもそうしてきたのですから。

魔導ギルド。

確かにココはそう呼ばれる場所ですが、ただ単にそういった商
品を取り扱っているお店と言っわけではありません。

取り扱っていますは主に魔導関係全般。

商品の取り扱いから、依頼の仲介。

更には素材、遺跡などの情報の提供や探索のサポートまで。

仲介屋。

ただ店と言うよりそう呼ぶ方が意味としてはシックリくると思います。

魔導関連の商品の売買。

素材に関しての情報。

危険地帯へ赴く際の冒険者との橋渡し。

それら全てを取り仕切るのがココなのです。

故に情報屋としての側面も当然。

ただ1人闇雲に走るよりも専門の者に。

よく言う、餅は餅屋にと言うヤツです。

「身長は大体マスターより頭一つ分ぐらい下。頭髮は黒でしたね。白い…身体にピツタリとした感じの変わった服装、多分北の方の独自の衣装かとは思いますが、はじめて見る感じの…今まで見た事のない衣装なので本当に多分ではありませんけど」

あの時見た彼の姿を臉の裏に浮かべ、その特徴を事細かに述べていく。

「でだ、結局の所ソイツは一体なにやらかしやがったんだ？」

「すみませんそれは…ただ本人酷く混乱…錯乱してますから騒ぎになってますかも」

言葉にして思い辿り着けた、予測できた可能性の一つ。

正直嬉しくない可能性。

「…大事…にはなって欲しくない相手というコトか？」

疑問系ながら確認の意が強いマスターの言葉。

そこには普段の陽気さは無くて、真剣みを帯びた大人の男性としての強さみたいなものを感じる。

「……はい、できることならば衛兵や騎士よりも早く見つけた

いです」

「恋人……って訳でもなさそうだな。厄介事か？」

「…はい」

普段の私でしたら、多分前半の言葉だけで取り乱していたでしょうが今日はそんな気持ちにもなれません。

マスターも多分判ってる。

だからこそその軽口の装い。

マスターなりの確認なのかも。

「とりあえずお前さんにとって被害者が加害者かどちらかだけでも言ってくれや。でなきゃ扱いに悩む」

話せない…ただ言葉のニュアンスだけで受け入れ応えてくれるマスターには、毎度毎度本当に正直頭が上がりません。

「ただし今この時だけはだからな」

まあ付け加えられた一言に納得いかない感がバリバリ感じられました。

事後説明は……まあそれは後で考えましょう。

とにかく今は少しでも早くです。

「ひとまず今はどちらかも判別付かないんです。私自身突然な事で事態がさっぱりですから」

ソレは正直な感想。

「まあ状況だけ見れば多分相手方が加害者…です。けど……」

「ソレが本当か、わっかんねーってか。ったくホント面倒事だな」

「…すみません」

「まあイイや、取り合えず聞き回ってはやる。ただし焦るなよ、いくら情報も取り扱ってるつつたって微妙に畑違いなんだからな」

「はいすみません、いつもいつも無理ばかり言ってしまったって」

本当に頭が上がりません。

「いいいいいさ、我が国一の魔鋤技師様の頼みとあっちゃー鼻屑にして貰えてる仲介屋としちゃ聞かない訳にもいかねーだろって」

「本当にすみません。では私も一度外を回ってみますので。ではまた後で伺いますから」

何でも無いコトの様に言ってくれますマスターに最大限の感謝を。

そして私は時を惜しむままに外へと駆け出していきます。

確かにマスターの言う通り今回のコレはマスターの取り扱っている情報とは畑違いでしょうから。

だから私自身。

それに居ても立ってもいられないにはかわりありませんしね。

「あつおい……って行っちゃったか。まったく焦るなって言ったにもかかわらず……まったく聞いちゃいねえたら。しかし何者なんだかな」その誰かさんとやはらは。言葉遣いを気にする余裕も忘れさせる相手……ホント訳ありの恋人とかじゃねーか」

もしもそうなら泣くヤツが大勢出そうだなー。

頭の中を無理矢理陽気に戻して軽く笑ってやる。

この国で……否、世界中で唯一ただ1人、浮遊石と言う伝説を現実にしちまった天才魔鋳技師の姿を。

まっ正直本人が何処まで自覚してるかわからねえが特別中の特別。

技師としては若過ぎる容姿。

技師本人ではなく単なるお手伝いの見習いであるとした情報操作。

それでも狙う輩は確実に在る。

これでもし技師本人と知られたら考えただけで恐ろしい。

「まったく、世間を知らねえお嬢様はお守りのしがいがあるって

モノよ」

当人は世間に慣れてきたと思ってる様だが俺から見たらまだまだ。

だからこそ楽しいんだが。

「まったく楽をさせてくれねーなあシス」

俺の情報にかすりもしねえ本気の本気で正体不明な1人の女性。まあアレで17歳ってのある意味スゲーけどな。

ぱつと見、14、5の少女と言った方がいい様な容姿。

本来の仕草は立派に淑女だが、普段は俺らに合わせる様に砕けた態度を取るからさらに違和感がない。

「それじゃまつ期待には応えてやんねーとだけど…」

そんな娘の様な少女をあそこまで慌てさせた相手。

「下手なことしてやがったらただじゃあすまさねえからな」

これが娘を心配する親の気持ちなのか、などと思いつつも店に來ていた数人の情報屋に声をかける。

全員が全員快く首を縦に振ってくれた。

さてさてどんな馬の骨なんだろうなあ。

そして…

情報は意外と早くに届いた。

シスの言い様から判断して、真っ先に衛兵連中に当たりをつけ
たのが功をそうした様子。

ただ、もう一つ。

面倒な情報も一緒に入ってきたのだがな。

一章 第十話 【夜の街】

完全に日が落ちていても今だ喧騒と灯りに満ちた街中を走る。

マスターがあのお店を酒場としてもいる様に冒険者という者達は大方賑やかな騒ぎが好きな人たちが多い。

そしてお酒と言うものはソレを容易に引起してくれる。

だからこそ冒険者の皆さんはお酒を好み、騒ぎ楽しむのだと、マスターの言葉。

故に各種ギルドを中心に酒場や安宿が集まり、その客として冒険者が集う。

治安はけっして良いとは言えませんが、それでも活気は飛び抜けている街の一角。

日中はそうでもなかったですけど、日も落ちた今は勢いが全然違います。

昼とは比べ様も無いほどに荒々しく騒々しい世界。

マスターが「暗くなる前に」といつも言っている理由も、ただ眺めているだけで容易に理解できてしまえそうです。

ただ在るだけでその勢いに飲み込まれそうな…

そんな空気。

確かにコレは…かなり拙いです。

私はよりいっそう逃げ出した彼の身に不安を覚える。

何故か理由など自分でも判らない。

判らない事を自覚してしまっている。

が故にその感情に困惑する。

あんな何もかもが妖しげな人を。

何所の誰かなんて判らない。

どうやってあの場まで潜り込んで来たのかも判らない。

結界も破られた痕跡も…

決じ開けられた痕跡も…

弄られた痕跡も…

何も見つからなかった。判らなかった。

たとえ万が一正規の手順で開かれていたとしても、それならそれで感知出来ていなければおかしいですし。

そして未知の言葉。

彼の発した言葉にもまた引つ掛かりを感じる。

世界中の何所の言葉でもない。

聞き覚えの全く無い言葉。

でも…だからこそおかしいとも思う。

何故私は…

「いいえ、今はそんな事悠長に考えてる余裕は在りませんよね」

沈み込みそうになる思考を無理矢理散らし、再び探し人を求めて町中へと視線を飛ばしていきます。

右へ左へと。

脇の路地裏、人々の塊の中。

店の口や荷積み影。

目に留まるあらゆる場所に視線を飛ばし。

求める姿が無いのを判りながら次の場所へ。

「おっ可愛らしいお嬢ちゃんが1人だけでどうしたのかな」
迷子でしゅか」パパと離れちゃったでしゅか」

次は…と足を止めた所に赤ら顔の誰かが覗き込むように顔を近づけてくる。

余裕が無い心情だったせいなのか完全に不意打ちじみた勢い。

思わず身が固まる。

「ぎゃはははっオイオイロリコン、お子ちゃまが怯えちまってるじゃねーか」

目の前の顔の更に向こうから「ぎゃはは」っと嘲るような晒いが。

「ああっ！？うつせいぞテーマー！」

後からの声に目の前にまであった顔が離れていく。

途端大きく息が吐かれる。

どうやら呼吸すら止まっていた感じ。

吐かれた息を切っ掛けにか、頭が現状を認識する。

目の前の酔っ払い2人。

ケンカ寸前な感じのじゃれ合い。

正直、例え平時でも巻き込まれてくありません。

更に今は尚更。

逃げて追われても厄介。

なら……

「……………」

……

そして私は再びその場から走り出しました。

意識を喪失させ、折り重なるように眠る酔っ払いをそのままに。

とは言え他人に絡まれるのはこれ一度きりとはいかなかった。

無骨な冒険者や色やお酒を売りにしている店員の人たちがたむろ

しているこの界限。

見た目少女な容姿のせいなのか。

慌ててるように何かを探し回っている様子のせいか。

それともそのどちらもか。

かなりの頻度、多くの人たちに声を掛けられ続ける事となってしまうていた。

いえ、絡まれると言う表現は人によつては失礼かも。

ただ心配してくれただけの優しい人も少なくともありませんでしたから。

たから。

絡んでくる酔っ払い。

絡まれている所を庇ってくれた冒険者の人。

夜遅いのにと心配してくれた店の人や。

迷子と勘違いされて保護されそうになった衛兵の人。

軽く口を出してくるだけの人は良いのですが、しつこい人や強

引な人は全て最初の酔っ払いと同様強制的に意識を飛ばしてそのまま眠って貰い続けました。

扱いは難しいですが物理属性に比べて精神属性はこういうとき凄く便利なのです。

魔導学において大元とされる12属性。

【生】と【死】を基点とした【地】【水】【風】【火】の物理6属性。

【聖】と【魔】を基点とした【幻】【感】【夢】【心】の精神6属性。

学術によつては更に細かく細分化されていきますが簡単に分けてしまえばこれで大体の属性分別が可能となる基礎。

もつとも扱いが容易く、効果も目に見えてハッキリしている物理属性の方が圧倒的にメジャーで、精神属性などそれなりに知識のある学者が技師でもなければ聞き覚えすらないでしょう。

現に魔鋳学に携わるものの中でも物理12属性と源祖12属性と同一視している者達も少なくは無い。

仕方の無いことではあるのでしょうかね。

何にしても見た目印象は大きいですから。

と、そんな感じで精神への干渉は騒ぎを大きくしなくて済むのです。

人間怪我や血など目に見えるものには大騒ぎするものですがただ倒れてたり寝てたりする相手に対してはソコまで大げさにしないトコロがありますし。

それが酔っ払いなどと言った者たちともなれば尚更。

まっ最も、その認識が少々甘いものだったと言うのに気付いたときには既に事態は手遅れっぽい感じででしたが。

「キミ、ちょっと良いかな？」

少し低めの声と共に肩をつかまれ振り返る。

「なんででしょうか？」

警戒心強く、用心しつつ慎重に振り返る。

こうして声を掛けられたのはもう何度となるか。

声の調子から酒気は感じられないですけどそれでもいい人か悪い人かは判りませんから。

「いや何ね、君みたいな小さな子がこんな夜遅くにこんな所を出歩いててどうしたのかとね」

そして振り向いた先に居たのは衛兵のおじさん。

今日コレでもう三人目です。

「すみません連れの者とは少し離れてまして、少し先の【木こりの椅子】で落ち合うこととなっていますの」

そしてコレまでと同じように言葉を返す。

【木こりの椅子】とはマスターが営む酒場としてのあのお店の名前。

ギルドとしての側面もあるせいかなそれなりに知名度も高いとのコトらしいです。

加えて…

「それに私、もう小さな子と言われるほど子供ではございませんよ。見えませんかですがそれでも私、今年で17になりますから」

こう言えば多少恐縮してもらえる。

17歳もまた年若い、若輩の中には入るものの、流石に子ども扱いされる年ではないですから。

もつとも信じてもらえたかどうかは半々と、かなりショックな結果でしたけど。

しかし同じだったのはそれまで…

「なるほどそれは失礼したね。でだ、四半刻前にうちの衛兵に同じコトを言っただけだまだ落ち合わなくてもいいのかな」

ココまで言われて、思わず声が詰まってしまいます。

そのやり取りは確かに憶えあるもの、そしてその後は…

「それともまだ何かする気なのかな？人を昏倒させて歩いてる

お嬢さんは？」

マズイと感じた。

そして今だ肩に置かれたままの手。

身を捻ってもそのままだったその手の意味にようやく気付いて。

「……っ」

揮った力の手応えの無さに、更なる緊張が高まる。

「無駄だよお嬢ちゃん、コレでも衛兵隊長だからね。装備もそれなりなんだ」

優しげだけどしっかりとした芯を含んだ声。

言葉にも嘘は無い。

あの弾かれた様な感じは抗魔加工のされた防具に対してのものと同じ。

「さてさて、じゃあ詰め所の方でちょっとお話でも聞かせてもらおうかな」

優しげな口調ですけど、その内には有無を言わせぬ意思が感じられます。

逃げられない。

今のままでは確実に。

最悪の予測が脳裏に走る。

それだけは…それだけは絶対につ。

焦りが途端に膨れ上がってくる。

冷静さが飲み込まれる。

これ以上は流石に。

私は切り札の一つを切る事にした。

対抗魔術へと組み替えたソレ。

衛兵のおじさんのわずかに驚いた様な表情。

確認できたのは瞬き程度の短い数瞬。

認識できたのはただそれだけで…

次の時を待たずして意識は唐突に手放されることとなる。

一章 第十一話 【囚われの者】

ふと何かにつられる様に意識が覚醒する。

なんとなくですけど誰かに呼ばれたような…。

いつの間にか眠っていたのか硬い床に申し訳ない程度に敷かれていた薄い布団とおぼしきソレから身を起こす。

「……んっ…」

寝ぼけ眼を軽く擦りつつ視線を彷徨わせる。

誰かに呼ばれた様な、そんな気がしていたから。

本当にそうならちゃんと応えなければ失礼というものでしょうし。

「……ん？」

そんな取り留めのない事を考えつつ見回した室内。

ふとその視界に違和感を。

一拍遅れてその理由に気付きました。

「そっか…結局私……」

ポツリと呟く。

そしてごろりと再び視界を天井へと移す。

冷たさと圧迫感を感じさせる無骨な石でできたソレ。

今し方目にする事となった鉄格子と加えて自身の現状を如実に示してくれている。

結局逃げる事は出来なかった。

多分あの後すぐ…

力の手応えは確かに合った。

でも記憶はソコまで。

あのあとすぐに気絶させられたんだと思います。

「…どうしよう…本当に……」

後悔が心を苛む。

もっと上手くやれていた筈なのに。

何時もならもつと慎重になれてた筈なのに。

なんでこんな事に…。

気持ちが奮わない。

氣力が湧かない。

何もしようとは思えない。

「本当に…なんでこんな事に…」

石の天井を…

現状を突きつけるこの光景を…

見てたくなって…

拒絶したくて…

両手で視界を覆う。

バカだ…本当に。

なんて今の自分は……。

「おつようやく起きたかシス」

「……っ！」

ありえない声に驚愕のまま視線が彼を捉える。

「ったくなんて顔してやがるんだ？ テメーは」

呆れたような、更に不機嫌そうでもある声。

「…………マスター？」

——…なんで——

鉄格子越しに見上げた見慣れたその姿にしばし呆然としてしま
う。

「ったく大事にしたいとかほざいてたくせに何1人暴走し
てんだよお前は」

「なんで？」

内心浮かんだ気持ちが、一拍遅れて口に出る。

「なんでもなにもない、街中の騒動探らせたのはお前だろ。

加えてウチの店の名前まで出してやがって、情報屋から聞いてもし
やと思った矢先、衛兵からの連絡だ。正直呆氣に取られたぞオレ
も」

少し苛立ったかのように頭を掻くマスター。

「だから焦るなっただろ、全く」

「……すみません」

マスターの言葉一つ一つが自身の短慮さを責めたてるようで胸に痛い。

申し訳なさから溢れる涙を見せたくなくて、見られたくなくて、再び両腕で顔を覆う。

「本当に……すみませんでした」

「まったく…ホント、これだから世間知らずなお嬢様は…」

覆った視界の向こう側で、優しく頭を撫でられる感触を感じる。少しは世間に馴染んだと思ってましたのに…

久しぶりに聞くマスターの言葉。

ソレが今は…凄く嬉しいです。

それから暫く…

どれくらいか判らぬ間そう慰められて、落ち着いた頃合を見て牢からは出してもらえました。

どうやらマスターが身元引受人となってくれた様で重ねて御礼を。

そんな私にマスターがしたことと言えば顔を赤らめながらのデコピン一発。

痛かったですけど、何故か少し嬉しかったです。

「しかし件のネームレスマスターのお弟子さんとは言え、随分と無茶苦茶なお嬢さんですね」

そんな私たちの間に加わる様に三人目の声。

不意打ちの様な声に慌てて振り向くと、どこかで見た覚え…の

……
「……っ」

瞬間記憶との符号に身に緊張が走る。

「ハハハそう警戒しなくても…というのは難しいかな？大丈夫

事情は聞いたし、君みたいな子が過剰に警戒しようとする気持ちも判らない事は無いと思う。まあ行為自体は褒められたものじゃないがね」

あの時の衛兵のおじさん。

確か衛兵隊隊長とか言っていましたっけ。

でも…

「ネームレス？弟子？」

彼の語る言葉には聞き覚えの無い言葉がいくつも…。

「おや、お嬢さんは自身の先生が世間でどう呼ばれてますか知りませんでしたか？」

「まっそうだな、コイツも師匠さんも世間にはなーんも気にしてないってな感じだしなっ」

少し意外そうな隊長さんに可笑しさを隠さないマスター。

二人の言葉からその意味と理由は推測できました。

「もうっそんなに笑わなくてもイイじゃないですか。それとも帰っても宜しいんでしょうか？私コレでっ！急ぎたい用があるのですけど」

なんだか世間知らずを笑われてるみたいで面白くありません。というか本当にこんな所でふざけてる場合じゃ…。

「ああ、そいやまだシスには言ってなかったな」

笑い過ぎたのか、目尻に滲んだ涙を拭いながらウインク一つ。激しく似合ってませんけど今は突っ込んであげません。

「というか意味深過ぎる言葉にそんな気すら起きません。

「なんですか？」

そしてマスターからの一言。

ソレは…

「お前の捜し人、隣りに放り込まれてたみたいだぜ」

あまりに唐突過ぎて。

一拍。

二拍。

三拍。

「……………っ!」

意味がようやく脳に届いた瞬間、もの凄い勢いで後ろ振り返り、足首からグギッって嫌な音。

更には崩れたバランスそのままに顔面から正面となった鉄格子に向けて。

痛い…です…本当に…ココ最近で一番のですよ…。

いきなりの事態に驚き硬直してる感じの例の彼と視界に、大笑いするマスターの声を耳に。

私また本気で泣きたくなりました。グスン。

「…っ大丈夫ですかお嬢さん。今、医務室へあんな…」

「いえ、すみません。コレくらいなら大丈夫ですのでお気遣いなく」

あまりのことに、一拍遅れて隊長さん。

少し慌てた感じで手を引こうとするのを慌てて止め、自身の足でしっかりと立つ。

「……………とてもそうとは思えない勢いでしたが、本当ですか?」

私の言葉に納得しきれない様子の隊長さん。

礼節のしつかりとした印象を受けていた彼でも、思わず疑ってしまいたくなるほどだったのでしょうか。

齒にも骨にも異常は感じられませんかし出血の雰囲気もありませんのに。

「ガハハッ大丈夫大丈夫っあんま心配せんでもコイツの場合アレくらい日常茶飯事だからな」

「なっ何言ってるんですか!そんないつも転んでる様な…」

「転んでないか?」

「……………うゝ…イジワル」

否定できないのが凄く悔しいです。

「はいはいお遊びはそれくらいで。そろそろ私の話を聞いていただきたいのですがよろしいでしょうか?」

「っ！はっはい、すみません」

「おおっそうだった。スマンスマン忘れてたぜ」

隊長さんの言葉にマスターと揃ってビクツと反応。

と言うかマスター流石にその言葉は失礼過ぎですよ。

あまりの言葉にちよつと睨み目。

まあ私もまた強く言えない態度でしたけど。

いけませんね、こうこの人と一緒にだと適度な緊張感と言うのが保てませんですよ。

「…コホン。それでお話というか、お尋ねしたいことなのです
が…」

そこでコホンと一つ言葉を切って。

「あつ申し送れましたが、私第8衛兵部隊隊長のマルタ・カリバ
スルと言います。えつと…シスさんでよろしかったですよね」

「あっはい、すみません。シスと言います」

尋ねられて初めて気付きました。

そういえば私、名も名乗っていませんでした…と。

「はい、それでシスさん。まずは貴女の捜し人と言うのはこの
彼で間違いありませんね」

「はい間違いありません。あの…すみませんでしたいろいろと
ご迷惑をかけまして」

こちらを伺うように様子見ている彼を今一度確認して、隊長さ
んには深く頭を下げる。

彼の事と言い、私自身の事と言い、本当にいろいろと。

穴があつたら入りたい気持ちと言うのはまさしく今の様な状態
だと思っています。

「いえ、それはもう良いですから、ね。です、私が聞きたい
のは君の使っていた魔導具についてなんだけど…かまいませんで？」

ビクツ！！

そんな音が聞こえそうなぐらいの勢いで心臓が跳ね上がります。

「えっと……その、できればその……あまり……」

なんと言いますか、何気にまずかったり？

「それはそうですね、貴女方に見てみればお仕事上の生命線あまり探られたくないというのは理解できます」

なにかお話の流れに嫌な予感しか感じないのですけど。

「ですがこの街を護る事を勤めとする者として、私にもまたどうしても譲れないモノがあると言う事を勝手ながら判って頂きたいのです」

えっと、なんとなく回れ右して今すぐココからダッシュで逃げたい気持ちですが。

ダメですよ……いろいろな意味で。

「私どもに使用した魔導具。人を……短時間とは言え昏倒させるソレを見せていただきたい」

あー……

「失礼かと思いましたが。意識を失われている間に一度、一通りの身体チェックはさせて頂きました。が、結局ソレらしい物は見つからず」

「……………」

身体チェックという言葉に反射的に全身が反応してしまいました。

それでも私だってちゃんと女性ですし……ってアレ？なんでしよこのリング。

「あつ、その手足のリングは封魔の枷ですので。すみません物事態が見つからない以上防衛面から貴女自身を直接魔的に封印処置させて頂く必要がありましたもので」

手足に各一つずつ。

気付いた私に対して隊長さんからの説明。
なるほどです。

たしかにソレっぽい感じ。

「止むえずとは言え無断の封印処置については謝罪いたします。ですが理解しておりますでしょうか？あなたの使われたソレがどれ程の脅威になるであろうかを。判ります？ソレ一つあれば、おおよそほば全ての警邏が意味を成さなく出来るというコトを」

ココに来て、隊長さんの言葉に次第に熱が籠り始める。

しかしそれは当然のことなのでしよう。

なにせ、自分たちが完全に無能化される可能性…否、恐れを孕んだこの力。

恐れぬはずがありませんでしょう。

判っています。

誰よりもその危険性は私が知っていた事。

改めて使ってしまった事に後悔を。

しかし今この場でソレに浸る事は赦されそうもありません。

今求められていますは…

目立たぬよう静かに一度深く息を吸い。

握っている拳に気持ち分の力を。

視界をわずかに閉じ、静かにゆっくりと呼気を吐き出す。

鼓動を宥めて。

心を落ち着けて。

思考を回転させて。

改めて隊長さんを見上げます。

そして私は…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7999d/>

世界樹の御子たちへ

2010年10月9日22時20分発行